

木島・下久保遺跡

主要地方道伊勢崎深谷線(東毛広幹道【境工区】)社会資本総合整備
(地域住宅支援)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2012

群馬県伊勢崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

木島・下久保遺跡

主要地方道伊勢崎深谷線(東毛広幹道【境工区】)社会資本総合整備
(地域住宅支援)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

群馬県伊勢崎土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

木島・下久保遺跡の発掘調査は、主要地方道伊勢崎深谷線の整備工事に伴い、これに関わる埋蔵文化財の保護を目的として、平成22年1月に財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施したものです。

国道354号バイパスを中核とする東毛広域幹線道路は、県央と東毛の各都市の物流・連携を促進するために建設が進められておりますが、伊勢崎深谷線の交差箇所はこの東毛広域幹線道路の一部を構成しています。したがって今回の発掘調査にかかわる境工区の完成は、主要幹線道路などとの連結を果たし、伊勢崎市及び隣接市町村はもとより、全県的な発展に大きく寄与するものと期待されます。

発掘調査範囲は、東武伊勢崎線の南に隣接する狭小な範囲に限られましたが、成果として、遺物集中箇所や土坑、溝などの遺構が発見され、古墳時代から近世に至るまでの人々の営みの一端を垣間見ることができました。

この調査成果をまとめた本報告書が、地元伊勢崎市はもとより、群馬県の歴史理解の一助となることを願ってやみません。

また、この度の報告書上梓に至るまでには、群馬県伊勢崎土木事務所、群馬県教育委員会、伊勢崎市教育委員会、ならびに地元関係者の皆様に多大なるご協力を賜りました。ここに心から感謝申し上げますとともに、本書が広く活用されることを祈念しまして序といたします。

平成24年7月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



理事長 須田 榮 一

例 言

1. 本書は、平成21年度主要地方道伊勢崎深谷線住宅市街地基盤整備事業に伴い発掘された木島・下久保遺跡の調査成果を、平成24年度主要地方道伊勢崎深谷線(東毛広幹道【境工区】)社会資本総合整備(地域住宅支援)事業に伴う木島・下久保遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書として刊行したものである。
2. 木島・下久保遺跡は伊勢崎市境木島368-1、368-2、369、370-2、370-3番地に所在する。
3. 事業主体 群馬県中部県民局伊勢崎土木事務所
4. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 整理主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(平成24年4月1日から)
6. 木島・下久保遺跡の発掘調査期間と体制は次の通りである。
履行期間 平成21年12月1日から平成22年3月31日
調査期間 平成22年1月1日から平成22年1月31日
調査面積 2,023.3㎡
調査担当 須田正久(主任調査研究員)
遺跡掘削工事請負 (有)毛野考古学研究所
地上測量委託 株式会社シン技術コンサル
自然科学分析 株式会社火山灰考古学研究所
7. 木島・下久保遺跡の整理期間と体制は次の通りである。
履行期間 平成24年4月1日から平成24年10月31日
整理期間 平成24年4月1日から平成24年5月30日
整理担当 須田正久(主任調査研究員)
8. 本書作成の担当者は次の通りである。
編集・本文執筆 須田正久
デジタル編集 齊田智彦(主任調査研究員)
遺物写真撮影 佐藤元彦(補佐総括)
遺物観察 石製品 岩崎泰一(上席専門員)、土師器 桜岡正信(資料統括)、陶磁器 大西雅広(上席専門員)
9. 発掘調査及び本書作成にあたり、下記の諸機関にご協力いただいた。記して感謝の意を表したい。(順不同)
群馬県中部県民局伊勢崎土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、伊勢崎市教育委員会文化財保護課
10. 発掘調査諸資料及び出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

凡 例

1. 本書の遺構図中にある+印は、国家座標値(世界測地系)を表す。また、そのグリッド名称は、国家座標値の下3桁のみを用いて表記した。
2. 遺構図中で使用した北方位は座標北を示す。(真北方向角偏差0° 21'01.10")
3. 遺構の方位は、座標北を基準として長軸の傾きを計測した。

4. 遺構図については、各挿図中に縮尺を示したが、原則として以下の縮尺で掲載した。
遺跡全体図 1:400 1:500 1:800 遺物集中箇所 1:20 土坑・ピット 1:40 溝 1:40 1:60 1:80
5. 遺構計測値において全容が計測できない遺構については検出部の実測値を()で表記した。
6. 遺物図及び遺物写真の縮尺は以下の通りである。
石製品・土師器・陶磁器 1:3
7. 遺物の計測値は、欠損品の数値には残存値に()を付して完形品と区別した。
8. 本書で使用したテフラの名称及び降下年代は以下の通りである。
浅間B軽石・As-B(1108年) 榛名二ツ岳火山灰・Hr-FA(6世紀初頭) 浅間C軽石・As-C(4世紀初頭)
浅間板鼻黄色軽石・As-YP(13,000~14,000)
9. 本文中に使用したAs-B混土、As-C混土はそれぞれの軽石が混入した土層を表している。
10. 遺物観察表(土器)の色調は、農林水産省農林水産技術会議 監修、財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版標準土色帖』1996年版色名を使用した。
11. 本書に掲載した土器の図版や観察表での表現は以下の通りである。
・弥生土器と土師器についての明確な区分はしていない。
・胎土の細砂粒と粗砂粒は直径2mmほどで区別した。
・成・整形の特徴の項目にあるハケ目本数は1cmあたりの本数を数えている。
・土器計測位置の表現は口径：口、底径：底、器高：高で略記した。
12. 陶磁器観察表(第4表)における「森田・横田分類I-5b類」は『大宰府出土の輸入中国陶磁器について』-形式分類と編年を中心として- 横田賢次郎 森田 勉 九州歴史資料館研究論集4に準ずる。
13. 図中で使用したスクリーントーンは次の通りである。
As-B  Hr-FA 
14. 本書で使用した地形図は下記の通りである。
国土地理院地勢図 1:200,000「宇都宮」(平成18年4月1日発行)
国土地理院地形図 1:25,000「伊勢崎」(平成15年2月1日発行)
国土地理院地形図 1:25,000「上野境」(平成14年12月1日発行)
伊勢崎市 現況図 1:2,500 No.51 (平成22年10月測量)
(この地図の転載にあたっては、伊勢崎市の許可を得て使用したものである。)

目 次

| | |
|---------------------------------|----|
| 序 | |
| 例言 | |
| 凡例 | |
| 本文目次・挿図目次・表目次・写真図版目次 | |
| 第1章 調査の経過と方法 | |
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 調査と整理の方法 | 2 |
| 第3節 基本層序 | 4 |
| 第2章 地理的環境と歴史的環境 | |
| 第1節 地理的環境 | 5 |
| 第2節 歴史的環境 | 6 |
| 第3章 検出された遺構と遺物 | |
| 第1節 遺跡及び調査の概要 | 10 |
| 第2節 遺物集中箇所 | 11 |
| 第3節 土坑 | 12 |
| 第4節 ビット | 14 |
| 第5節 溝 | 14 |
| 第6節 As-B下面及び下層面調査 | 18 |
| 第7節 遺構外出土遺物 | 19 |
| 第4章 自然科学分析 | |
| 第1節 木鳥・下久保遺跡古における火山灰分析 | 20 |
| 第2節 木鳥・下久保遺跡における プラント・オパール分析 | 23 |
| 第5章 調査の成果 | 27 |

挿図目次

| | |
|-----------------------------|----|
| 第1図 遺跡位置図 | 1 |
| 第2図 遺跡調査区位置図 | 2 |
| 第3図 調査区範囲図 | 3 |
| 第4図 遺跡低地部範囲及び基本層序測量地点・基本層序 | 4 |
| 第5図 地形分類図 | 5 |
| 第6図 周辺遺跡位置図 | 7 |
| 第7図 遺跡全体図 | 10 |
| 第8図 1号遺物集中箇所と出土遺物 | 11 |
| 第9図 2号遺物集中箇所と出土遺物 | 12 |
| 第10図 1号から12号土坑 | 13 |
| 第11図 1号から3号ビット | 14 |
| 第12図 1号・2号溝と1号溝出土遺物 | 15 |
| 第13図 3号・4号溝と4号溝出土遺物 | 16 |
| 第14図 As-B下面調査部分下層面調査トレンチ位置図 | 18 |
| 第15図 南壁・下層調査範囲・試掘トレンチ | 19 |
| 第16図 遺構外出土遺物 | 19 |
| 第17図 自然科学分析試料採取地点位置図 | 20 |
| 第18図 南壁東寄り深掘地点の上層柱状図 | 24 |
| 第19図 中央部試掘トレンチの上層柱状図 | 25 |
| 第20図 西壁深掘地点の上層柱状図 | 25 |
| 第21図 植物性炭体(プラント・オパール)顕微鏡写真 | 26 |
| 第22図 遺跡全体図 | 27 |
| 第23図 1号・4号基本土層 | 28 |
| 第24図 1号・2号遺物集中箇所出土遺物 | 28 |
| 第25図 遺構外出土遺物 | 28 |

表目次

| | |
|--------------------------------|----|
| 第1表 周辺遺跡一覧表 | 8 |
| 第2表 1号遺物集中箇所 出土遺物観察表(土器) | 17 |
| 第3表 2号遺物集中箇所 出土遺物観察表(土器) | 17 |
| 第4表 1号溝 出土遺物観察表(陶磁器) | 17 |
| 第5表 4号溝 出土遺物観察表(陶磁器・石製品) | 17 |
| 第6表 土坑計測表 | 17 |
| 第7表 ビット計測表 | 18 |
| 第8表 溝計測表 | 18 |
| 第9表 遺構外出土遺物観察表(土器) | 19 |
| 第10表 テフラ検出分析結果 | 24 |
| 第11表 屈折率測定結果 | 24 |
| 第12表 木鳥・下久保遺跡におけるプラント・オパール分析結果 | 25 |

写真目次

| | |
|-----------------------|-----------------------|
| PL. 1 1. 調査区全景(西から) | 2. 1号遺物集中箇所全景(西から) |
| PL. 2 1. 1号遺物集中箇所近接 | 2. 2号遺物集中箇所全景(西から) |
| 3. 1号土坑全景(南から) | 4. 1号土坑セクション(南から) |
| 5. 2号土坑全景(南西から) | 6. 2号土坑セクション(西から) |
| 7. 3号土坑全景(東から) | 8. 3号土坑セクション(東から) |
| PL. 3 1. 4号土坑全景(東から) | 2. 4号土坑セクション(南西から) |
| 3. 5号土坑全景(東から) | 4. 5号土坑セクション(西から) |
| 5. 6号土坑全景(南から) | 6. 6号土坑セクション(南から) |
| 7. 7号土坑全景(南から) | 8. 7号土坑セクション(南から) |
| PL. 4 1. 8号土坑全景(南から) | 2. 8号土坑セクション(東から) |
| 3. 9号土坑全景(東から) | 4. 9号土坑セクション(東から) |
| 5. 10号土坑セクション(南から) | 6. 11号土坑セクション(南から) |
| 7. 1号ビット全景(南から) | 8. 1号ビットセクション(南から) |
| PL. 5 1. 2号ビット全景(南から) | 2. 2号ビットセクション(南から) |
| 3. 1号溝全景(西から) | 4. 2号溝全景(南から) |
| 5. 1号溝セクション(西から) | 6. 2号溝セクション(東から) |
| PL. 6 1. 3号溝全景(西から) | 2. 3号溝セクション(西から) |
| 3. 試掘トレンチ断面(南東から) | 4. As-B下面水田遺構確認面(東から) |
| 5. 1号基本土層(東から) | 6. 2号基本土層(西から) |
| 7. 3号基本土層(東から) | 8. 4号基本土層(北から) |
| PL. 7 1号遺物集中箇所1 | 2号遺物集中箇所1 |
| 2号遺物集中箇所2 | 1号溝1 |
| 4号溝1 | 4号溝2 |
| 遺構外1 | |

第1章 調査の経過と方法

第1節 調査に至る経緯

東毛広域幹線道路は、JR高崎駅東口を起点とし、玉村町、伊勢崎市、太田市、館林市を通り最終的に板倉町まで至る総延長距離58.61kmの広規格道路として設計された。高崎駅東口線、国道354号、主要地方道高崎伊勢崎線、主要地方道伊勢崎深谷線、東毛幹線等のバイパスや都市計画道路を連結し、群馬県の中毛から東毛を東西に貫く新たな動脈としての機能を期待されるものである。

折しも伊勢崎市は、平成17年1月1日に旧境町と合併を行い、都市環境の整備を図ることとなったが、従来市の市街地から旧境町に至る既存の伊勢崎深谷線道路では朝夕を中心に慢性的な渋滞が発生していたため、これらの解消が急務となっていた。この伊勢崎深谷線の一部は東毛広域幹線道路の一部となっており、当該区間の完成と供用は生活圏の拡大や物流の効率化及び活性化をもたらし、伊勢崎市及び周辺市村の発展を支援するものと期待されることとなった。

そこで、この東毛幹線道路総延長58.61kmのうち伊勢崎市を通過する11.67kmでの工事が進められることになった。このうち境工区は2.85kmで、1.45kmを伊勢崎市が、1.40kmを群馬県がそれぞれ施工を行うことになったのである。

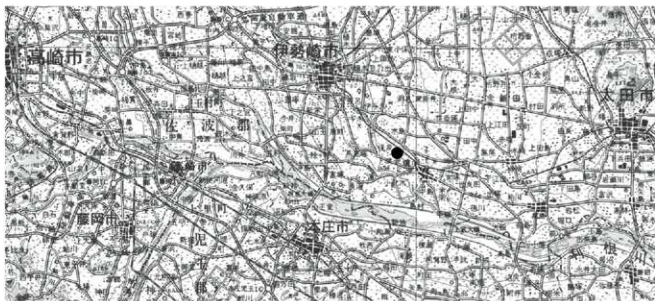
群馬県施行部分である1.40km範囲において、周知の埋

藏文化財包蔵地を通過することが判明したため、埋藏文化財の取扱にかかわる行政的な措置が必要となった。平成21年11月、群馬県教育委員会は、工事主体である群馬県中部県民局伊勢崎土木事務所からの照会を受け、発掘調査の必要性の可否とその範囲を確定するための試掘調査を群馬県教育委員会事務局文化財保護課(以下、県文化財保護課と略)が実施した。これによって木鳥・下久保遺跡と上武士・堀北遺跡において縄文時代の竪穴住居や土坑、溝などの検出と遺物出土が確認された。県文化財保護課は、試掘調査の結果から埋藏文化財に対する保護の措置が必要な旨を、伊勢崎土木事務所へ通知するとともに、取扱についての協議を行った。その結果、工事計画の変更は不可能と考えられるに至ったため、記録保存の措置を講じることとして発掘調査を行うことが決定された。

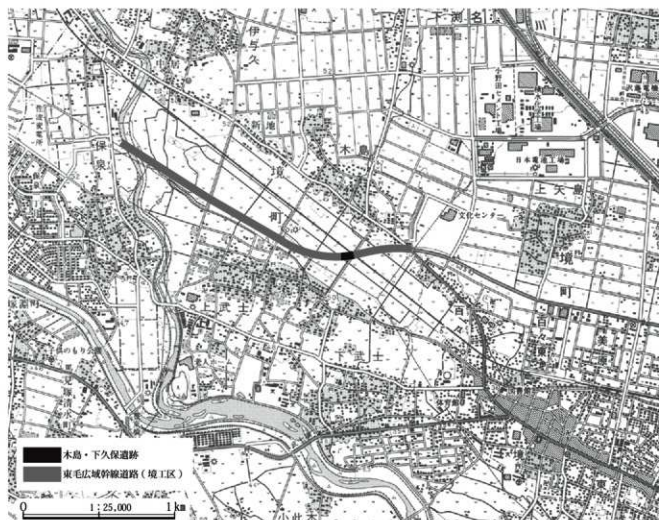
平成21年12月1日付けで、伊勢崎土木事務所との受託契約を締結し、財団法人群馬県埋藏文化財調査事業団(当時)が発掘調査を実施することとなった。

調査は、木鳥・下久保遺跡を平成22年1月から1ヶ月(2,023.37㎡)、隣接する上武士・堀北遺跡については工事工程と調整を図りながら実施することとなった。

本書はこれら2遺跡のうち木鳥・下久保遺跡の発掘調査にかかるものである。



第1図 遺跡位置図 (国土地理院1:200,000「宇都宮」使用)



第2図 遺跡調査区位置図 (国土地理院地形図1:25,000 「宇都宮」「上野境」を使用)

第2節 調査と整理の方法

調査予定地は、東武伊勢崎線と道路で挟まれた1区画であり、木島・下久保遺跡1区として調査を開始した。

発掘調査区は、東武伊勢崎線に隣接していたため、東武鉄道と事前に協議を行い、危険防止を目的として、始業前後に東武鉄道に連絡を入れることや、踏切の信号点滅を合図として掘削機械の稼働を停止することなどの確認を行った。

調査区画となるグリッドは国家座標系を用いた5m単位とした。グリッド呼称は南東隅を原点として、その座標値の下3桁をグリッド交点に表記した。

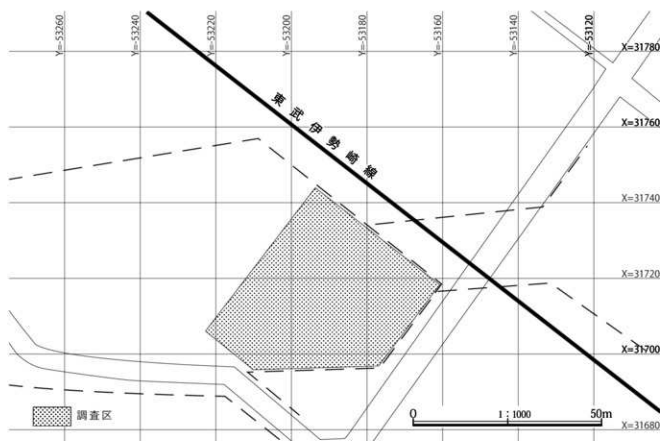
発掘調査は、トレンチにより、遺構確認面を確定し、掘削機械による表土掘削を北東側微高地部分から行い、作業員によるふるい、移植ゴテ等での遺構検出、精査作業、写真撮影、測量という手順で調査を進めた。試掘結果を

踏まえて、微高地部では基本土層Ⅶ層上面を、低地部では基本土層Ⅸ層にあたるHr-FAの上面を遺構検出面とした。ここでは古墳時代及びそれ以降の調査を実施した。その後古墳時代以前の遺構確認のため、微高地部や低地部にそれぞれにトレンチを入れ、下層面の調査を行ったが遺構は確認されなかった。

遺構記録測量は、断面図、平面図測量ともに、原則として1:10、1:40、1:100を遺構ごとに選択して行った。なお、測量業務は委託して行った。記録写真撮影はデジタルカメラと6×7判カメラを使用した。遺跡の全景は高所作業車を使用し撮影を行った。

整理業務は、平成24年4月から5月までの2ヶ月間を整理期間として実施した。隣接する同事業である上武士・堀北遺跡の整理が10月までの実施期間であるため、本遺跡の履行期間もこれにあわせて10月までとなった。

整理作業は4月に報告書掲載遺物を選定し、その実測・



第3図 調査区範囲図（伊勢崎市現況図 1:2,500 No.51を使用）

トレース・写真撮影作業を行った。また、記録図の確認を行い、平面図・断面図の照合・修正作業を行った。遺物図や遺構図は、デジタル機器によるトレース図作成や編集を実施した。

5月に本文原稿執筆とレイアウト作成作業を実施し、報告書原稿作成作業を終了した。

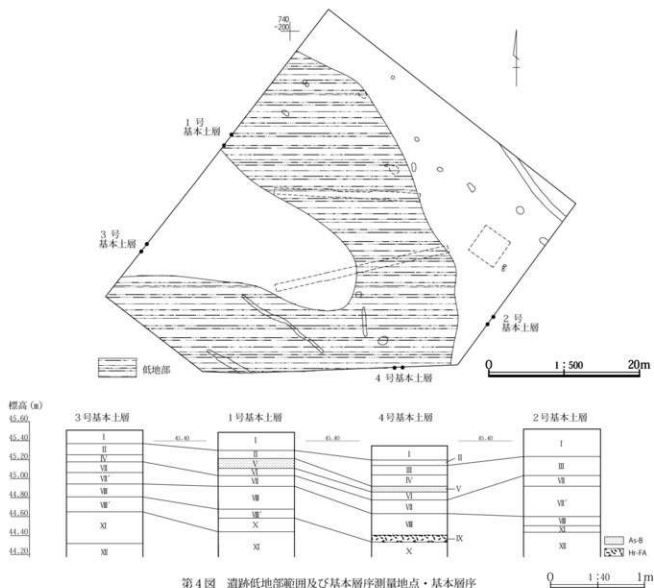
7月に印刷業者に報告書の原稿をデジタルデータで入稿し、印刷・製本作業を行った。

発掘調査日誌抄録

平成22年

- 1月4日 調査区周辺の環境整備
- 5日 調査区確認 雑草除去
- 6日 木杭・ロープによる調査区設定
試掘坑による遺構確認作業(南側)
- 7日 事務所設置 発掘機材運搬 試掘坑による遺構確認作業(中央部)
- 8日 重機による掘削開始 測量業者による基準点確認作業
- 12日 北東部より遺構検出作業開始

- 13日 遺構検出
(1号から4号土坑、1号から3号ピット、1号溝)
- 14日 土坑、ピット断面写真、測量 5号から7号土坑、1号溝検出作業
- 15日 低地部精査 遺物集中箇所(1号)検出作業
調査区南A-S-B下面トレンチ調査 3号・4号溝検出作業
- 18日 8号から12号土坑検出作業 1号から7号土坑、1号から3号ピット全景写真
- 19日 土坑、溝、ピット完掘写真撮影 土壌分析のための試料採取
- 21日 低地部精査 遺構検出作業
- 22日 低地部精査 南壁断面精査
- 25日 遺跡全景撮影準備 高所作業車での全景写真
- 26日 縄文時代遺構確認のためのトレンチ調査
- 27日 機材整備及び撤収準備 埋め戻し作業
- 29日 調査区周辺清掃作業 撤収作業引き渡し



第4図 遺跡低地部範囲及び基本層序測量地点・基本層序

第3節 基本層序 (第4図, PL. 6)

本遺跡は、微高地と低地が入り組んだ地形に立地している。このため基本層序は微高地部(2号・3号)と低地部(1号・4号)でテフラの堆積状況に相違が見られる。このテフラなどの一次堆積層は低地に見られ、微高地部には見られない。また、本遺跡の堆積層の特徴として、河川の氾濫が地形形成に大きな影響を及ぼしており、微高地部も低地部も河川の氾濫を起因とする。堆積物が中位から下位にかけて厚く堆積している。これは遺跡西側を流れる粕川や広瀬川の氾濫の影響を受けているからであろう。

分層については、火山灰考古学研究所の分析結果を参考に行った。

基本土層

- I層 表土 現代耕作土
- II層 褐色土(10YR4/4)耕作土床土。鉄分沈着層主体。
- III層 褐色土(10YR4/6)粗粒砂質土を含む。締まり弱い。
- IV層 暗褐色土(10YR3/3)As-C軽石を混入する層。細粒白色軽石を全体に含む。やや締まりあり。
- V層 As-B一次堆積層。
- VI層 黒色土(10B2/1) 粘質土。水田耕作土か?
- VII層 褐灰色土(10YR6/1)細粒白色軽石を少量含む。粘質土。洪水堆積物。
- VIII層 暗褐色土(10YR6/1)細粒白色軽石を少量含む。Hr-FA塊を少量含む。粘質土。洪水堆積物。
- IX層 褐灰色土(10YR5/1)鉄分塊を含む。Hr-FA塊を少量含む。粘質土。洪水堆積物。
- X層 黒色土(10YR2/1) As-C軽石を混入する層。
- XI層 灰白土(10YR8/1)粘質土。洪水堆積物。粘質性非常に強い。
- XII層 灰白土(10YR8/1)砂質土を含む。洪水堆積物。締まり弱い。

第2章 地理的環境と歴史的環境

第1節 地理的環境

木島・下久保遺跡は、群馬県の東南部の伊勢崎市境木島に所在する。伊勢崎市の地形は、広瀬川低地帯を挟んで北側の洪積台地と南側の沖積台地に大別することができる。

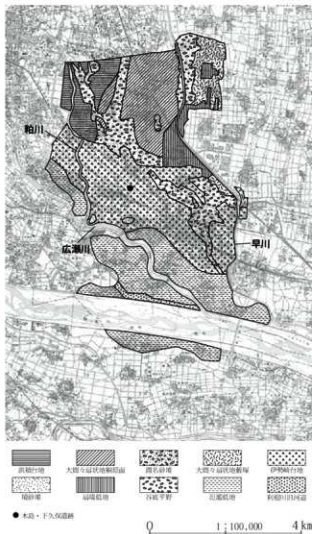
市域北部は、赤城火山麓扇状地と大間々扇状地Ⅰ・Ⅱ面に大別され、火山麓扇状地と大間々扇状地の間を粕川が、大間々扇状地Ⅰ・Ⅱ面の境を早川が南流する。赤城火山麓扇状地と大間々扇状地Ⅰ・Ⅱ面の南には伊勢崎台地と呼ばれる平坦な台地が広がる。伊勢崎台地は広瀬川に浸食され、広瀬川左岸には5m前後の崖線が続く。伊勢崎台地の基盤は砂礫が主体で、旧利根川(現広瀬川)により形成されたと考えられ、形成年代は、As-YP降下以後とされている。この砂礫に赤城火山麓扇状地や大間々扇状地の末端部が覆われ、地形区分を難しくしている。

これに対して、広瀬川低地帯と現利根川の間には沖積台地が広がる。この台地は荊川を境に高位・低位段丘面に区分され、外観は平坦だがそれぞれの段丘面には旧河道の痕跡が残されている。

『群馬県史』や『伊勢崎市史』、『境町史』に拠ると、本遺跡周辺域は伊勢崎台地上に立地するとされている(第5図)、遺跡のある広瀬川・粕川の合流点周辺域には微高地が点在していることが分かっている。現在は宅地化が進み、分かりにくくなってしまっているが、この微高地には古い集落があり、また、以前は桑畑として利用されていた。昭和21年に米軍が撮影した航空写真を見ると、三日月状の旧河道跡が明瞭に残り、また、国道354号バイパス関連の発掘調査においても広瀬川右岸に広がる高位段丘上の旧河道が数ヶ所で確認されており、広瀬川は激しく変流を繰り返していることが判明している。同様な河川の変流と微高地の形成は粕川流域にも見られ、縄文時代以後の氾濫やこれに伴う微高地の形成が確認されており、地形発達はずり以上に複雑である。

本遺跡では「伊勢崎砂層」とされるものは確認されていないが、『境町史 自然編』の中で澤口宏氏は、この伊勢崎砂層の分布は、伊勢崎市西部の神沢川付近から南東へ

延びていると述べており、遺跡地周辺の西今井や三ツ木地区において同砂層があるとしている。このことを踏まえれば、本遺跡が立地する微高地も伊勢崎台地上にあることになる。本遺跡は広瀬川合流点に近い粕川左岸側にあり、木島集落と上武士集落を載せる台地に挟まれた低地部に形成された微高地上に立地しており、位置的に見れば、本遺跡の低地部は粕川の旧河道とするのが妥当ではないかと考えられる。



第5図 地形分類図

旧境町の地形分類図(『境町史第1巻自然』平成3年3月25日発行より加筆修正して転載)転載にあたっては伊勢崎市教育委員会文化財保護課及び澤口宏氏の許可を得て使用したものである。

国土地理院 1:25,000「伊勢崎」上野地帯を使用

第2節 歴史的環境

木鳥・下久保遺跡からは土坑や溝などの遺構が検出されているが、時期を明確に判断する資料は乏しい。そのため、木鳥・下久保遺跡の歴史的な成り立ちや背景を明らかにするために、ここでは旧境町の遺跡を中心に歴史的環境を記載したい。

旧石器時代 旧石器時代の遺跡は、ナイフ形石器が出土した上洞名神谷遺跡(39)、槍先形尖頭器が出土した国指定史跡の十三宝塚遺跡(40)、細石刃核や槍先形尖頭器、剥片石器等が出土した上洞名遺跡(24)と下洞名塚越遺跡(20)がある。これらは13,000年前程のものと考えられている。

縄文時代 縄文時代の遺構の検出例は少なく、特に草創期から前期の遺構は見つかっておらず、三ツ木遺跡(14)や上洞名神谷遺跡、下洞名遺跡(19)から微隆起線文・爪形文・燃系文土器などが出土しているだけである。本遺跡に隣接する上武士・堀北遺跡(2)からは中期後半の加曾利E式期の竪穴住居が2軒見つかっている。後期の遺跡では、称名寺式期の竪穴住居や配土遺構が見つかった北米岡遺跡(10)がある。

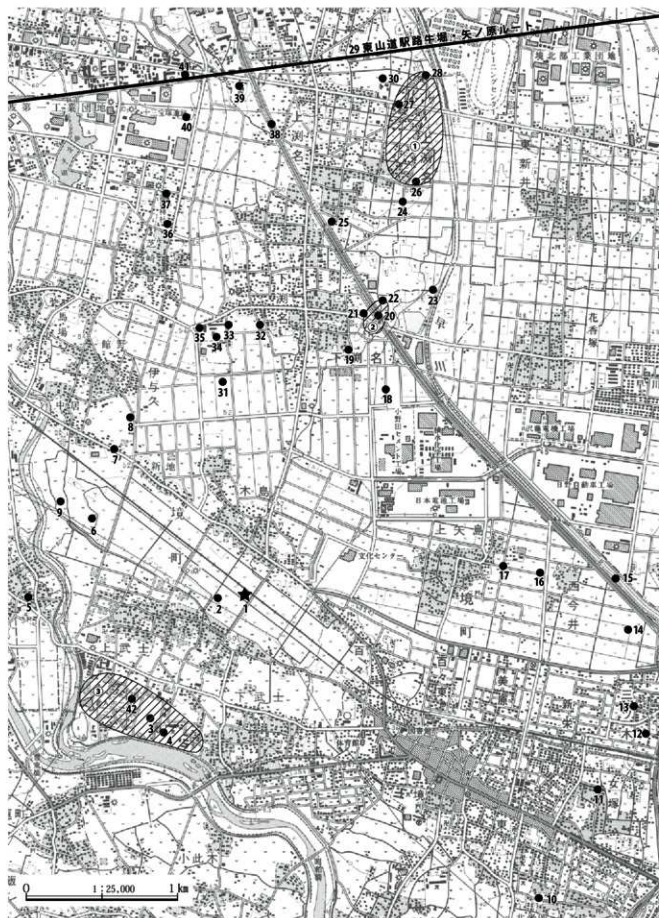
弥生時代 旧境町域では、弥生時代の遺構は検出されていない。下洞名塚越遺跡から二軒屋式の小型壺や赤井戸式、樽式などの土器片が出土しているだけである。

古墳時代 古墳時代になると、台地縁辺部に集落が形成され、後期になると集落も大規模になる傾向がある。前期の集落遺跡は、下洞名塚越遺跡、保泉遺跡(5)、土橋遺跡第5地点(35)等がある。本遺跡からもこの古墳時代前期の土器の集中箇所が見つかっており、周辺には集落の存在が想定される。中期の集落には十三宝塚遺跡、出口遺跡(32)、土橋遺跡(33)、采女小学校校庭遺跡(34)等がある。後期では、伊与久遺跡(41)、十三宝塚遺跡、上洞名裏神谷遺跡(38)、上洞名遺跡、出口遺跡、三ツ木遺跡等遺跡数が増加している。このような集落遺跡の増加は、農業生産の拡大を背景としてなされたものとして考えられ、首長層の成長により古墳も造られるようになった。三ツ木遺跡からは古墳時代初頭の方形周溝墓が見つかっているが、周辺地域には前期古墳は見られない。下洞名古墳群(②)内に所在する下洞名塚越遺跡からは古墳13基が、同じ古墳群内にある下洞名遺跡12からは古墳1基が見つかっている。これらの構築時期は5世紀後半

から6世紀のものである。この古墳群より北約800mには洞名古墳群(①)がある。その内の上洞名・雙見山古墳(27)は、全長約90mを測り、6世紀末から7世紀初頭の周辺では最大となる前方後円墳である。この古墳群の北西に隣接する三筆古墳群(30)からも6世紀代の円墳が2基見つかっている。本遺跡南西、粕川と広瀬川が合流する北側には、武士古墳群(③)がある。この古墳群には雙見山古墳と同じ前方後円墳で、多くの形象埴輪が出土した6世紀末の古墳とされる天神山古墳(42)がある。更に、この古墳群内にある武士遺跡(3)の調査では6世紀後半から7世紀にかけての円墳8基と帆立貝形の古墳1基が見つかっている。

奈良・平安時代 律令期の旧境町は「佐位郡」に属し「洞名、岸新、佐位」の三郷から編成されていたと考えられる。本遺跡の北約3kmに位置する十三宝塚遺跡からは、8世紀中頃に建立されたと考えられる寺院が確認され、「郡寺」の可能性も指摘されており律令期のこの地域を考える上で重要な遺跡である。また、この十三宝塚遺跡の北側には東山道駅路(牛堀・矢ノ原ルート)(29)が確認されている。この時期の集落は古墳時代よりも広がりを見せる。西今井遺跡(15)・(16)、上洞名遺跡、上洞名遺跡VI(26)、下洞名遺跡、下洞名遺跡12(22)等の遺跡から多数の竪穴住居が見つかっている。伊与久・老町田遺跡(6)、伊与久・老町田遺跡II(9)からはAs-Bで覆われた水田が見つかっている。

中・近世 中世に至ると、遺跡周辺地域には二つの荘園が相次いで成立する。大治五(1130)年頃に仁和寺法金剛院所領地として立荘・寄進された洞名荘と、保元二(1157)に金剛心院所領地として成立した新田荘である。洞名荘は、律令制下の佐位郡を領地として、秀郷流藤原氏の兼行(洞名大夫)らが開発・寄進し下司(荘官)を務めたのに対し、新田荘は新田義重らが新田郡西南部の「空閑地」を開発・寄進し、同様に下司として新田郡一円に勢力を拡大していった。隣接する両荘園は、概ね早川を境とし、遺跡周辺地域の木鳥(木嶋)・女塚・花香塚(はなか塚)の地はその狭間に当たる郷である。享徳四(1455)年の「新田荘田高在家注文」には荘域である木嶋などの地名に「さかりにどらる」の註釈が加えられており、領地境をめぐる攻防があったものと推察される。中世の遺構は下洞名塚越遺跡からは、「洞名館」の一部と考えられる堀が見つかっている。



第6図 周辺遺跡位置図 (国土地理院 1:25,000「伊勢崎」「上野城」を使用)

第1表 周辺道跡一覧表

| No | 道跡名 | 所在地 | 概要 | 文献等 |
|----|------------------|---------------|--|--|
| 1 | 木島・下久保道跡 | 伊勢崎市境 木島 | 本報告書 | |
| 2 | 上武士・堀北道跡 | 伊勢崎市境 上武士町 | 縄文時代の竪穴住居3軒。平安時代竪穴住居1軒。溝1条。 掘立柱建物1棟。近世の溝2条。 | (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2011「年報30」 |
| 3 | 武士道跡 | 伊勢崎市境 上武士町 | 6世紀後半～7世紀代の竪立貝形古墳(堀志村78号墳)1 基。円墳8基。 | 境町文化財調査報告書「武士道跡」 境町教育委員会 1982「境町古代道跡」 境町役場 1978 |
| 4 | 下武士道跡 | 伊勢崎市境 下武士町 | 土坑2基(近世、時期不明) | 境町文化財調査報告書「下武士道跡」 発掘調査概要 境町教育委員会 1978 |
| 5 | 保泉道跡 | 伊勢崎市境 保泉町 | 古墳時代の住居2軒。時期不明の土坑、溝。 | 「境町古代道跡」 境町役場 1978年 |
| 6 | 伊与久・志町田道跡 | 伊勢崎市境 伊与久 | As-8下水路、水路、溝。 | 境町文化財調査報告書「伊与久・志町道跡発掘調査 の記録」 境町教育委員会 2004 |
| 7 | 伊与久・久保田東道跡 | 伊勢崎市境 伊与久町 | 古墳時代の竪穴建物4軒。土坑7基。近世溝7条。 | 伊勢崎市文化財調査報告書第58集「伊与久・久保田 東道跡の発掘調査の記録」 伊勢崎市教育委員会 2005 |
| 8 | 伊与久・久保田東Ⅱ道跡 | 伊勢崎市境 伊与久町 | 古墳時代の竪穴住居1軒。竪穴状遺構1基。溝29条。奈良 時代の土坑2基。平安時代の竪穴住居9軒。掘立柱建 物1棟。溝7条。ピット29基。水田土坑7基。近世溝7条。 | 伊勢崎市文化財調査報告書第78集「伊与久・久保田 東道跡Ⅱ」 伊勢崎市教育委員会 2007 |
| 9 | 伊与久・志町田道跡Ⅱ | 伊勢崎市境 伊与久 | 縄文土器集中地点(前期)古墳時代から平安時代の溝33条。 土坑1基。ピット1基。墳跡。As-8下水路。中世以降の 土坑12基。 | 境町文化財調査報告書「伊与久・志町道跡Ⅱ」 伊勢 崎市教育委員会 2009 |
| 10 | 北米岡道跡 | 伊勢崎市境 米岡町 | 縄文時代後期竪穴住居1軒。配石遺構2基。溝2条。 | 「北米岡道跡」発掘調査報告書 県立伊勢崎女子高 等学校地歴部 1956「境町古代道跡」 境町役場 1978 |
| 11 | 女塚道跡 | 伊勢崎市境 女塚町 | 古墳時代の竪穴住居1軒。 | 「境町古代道跡」 境町役場 1978 |
| 12 | 下田道跡 | 伊勢崎市境 三ツ木町 | 古墳時代の竪穴住居1軒。平安時代の竪穴住居2軒。中 世以降の土坑、溝。 | 境町教育委員会文化財調査報告書「西林道跡 下田 道跡」 境町教育委員会 1980 |
| 13 | 西林道跡 | 伊勢崎市境 三ツ木町 | 古墳時代の竪穴住居9軒。土坑4基。溝1条。奈良・平安 時代の竪穴住居7軒。掘立柱建物1棟。土坑3基。溝 1条。中世以降の土坑、溝。土坑墓、井戸等。三ツ木城 周縁 | 境町教育委員会文化財調査報告書「西林道跡 第1 次発掘調査概要」 境町教育委員会 1979 境町教育委員会文化財調査報告書「西林道跡 下田 道跡」 境町教育委員会 1980 |
| 14 | 三ツ木道跡 | 伊勢崎市境 三ツ木町 | 古墳時代の竪穴住居38軒。方形周溝墓。奈良・平安時代 の竪穴住居170軒。中世土坑4基。井戸、溝等。 | 上武国地域地 埋蔵文化財発掘調査概報 IV「三ツ 木道跡 西今井道跡 小向田前道跡」 1976 |
| 15 | 西今井道跡 (郡理文調査) | 伊勢崎市境 西今井町 | 平安時代の竪穴住居200軒以上。掘立柱建物14棟。土坑 436基。井戸10基 | 一般国道17号(上武道跡)改築工事に伴う調査報告書 「西今井道跡」 1986 (財)群馬県埋蔵文化財調査事 業団 早川河川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告 書「西今井道跡」 1987 (財)群馬県埋蔵文化財調査 事業団 |
| 16 | 西今井道跡 (県教委調査) | 伊勢崎市境 西今井町 | 古墳時代から奈良・平安の集落跡。竪穴住居119軒。掘立 柱建物11棟。井戸5基。 | 上武国地域地 埋蔵文化財発掘調査概報 IV「三ツ 木道跡 西今井道跡 小向田前道跡」 群馬県教育 委員会 1976 |
| 17 | 上矢島道跡 | 伊勢崎市境 上矢島町 | 古墳から平安時代の竪穴住居。掘立柱建物。 | 境町文化財調査報告書「上矢島道跡発掘調査概要」 境 町教育委員会 1978 |
| 18 | 下瀧名・高田道跡 | 伊勢崎市境 下瀧名町 | 奈良・平安時代の竪穴住居3軒。中近世の竪穴状遺構10基。 土坑67基。井戸42基。溝37条。ピット多数。 | 境町教育委員会文化財調査報告書「下瀧名・高田 道跡」 境町教育委員会 2002 |
| 19 | 下瀧名道跡 | 伊勢崎市境 下瀧名町 | 古墳時代の竪穴住居3軒。古墳1基。土坑1基。奈良・ 平安時代の竪穴住居100軒以上。掘立柱建物5棟。溝36条。 土坑61基。井戸14基等。 | 境町文化財調査報告書「下瀧名道跡」発掘調査概要 境 町教育委員会 1978 |
| 20 | 下瀧名塚越道跡 | 伊勢崎市境 下瀧名町 | 旧石器時代の礫石刃核。古墳(円墳12基。方墳1基)。古 墳時代初期から10世紀代の竪穴住居265軒。土坑墓。掘立 柱建物13棟。土坑120基。井戸100基。中世の館跡、溝。 | (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第124 集「下瀧名塚越道跡」 1991 (財)群馬県埋蔵文化財 調査事業団 |
| 21 | 明神道跡 | 伊勢崎市境 下瀧名町 | 古墳時代の土坑1基。奈良・平安時代の竪穴住居3基。 中世の土坑墓1基。溝2条。近世土坑5基。 | 境町教育委員会文化財調査報告書「明神道跡発掘調 査報告書」附「瀧名出上古瓦、調査報告書」 境町 教育委員会 1975 境町教育委員会文化財調査報告書 昭和58年度埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 「寺家前道跡 明神道跡」 境町教育委員会 1985 |
| 22 | 下瀧名道跡12 | 伊勢崎市境 下瀧名町 | 古墳時代の竪穴住居3軒。古墳1基。土坑1基。奈良・ 平安時代の竪穴住居100軒以上。掘立柱建物5棟。溝36条。 土坑61基。井戸14基等。 | 伊勢崎市文化財調査報告書99集「下瀧名道跡12」 伊勢崎市教育委員会 2010 |

| No | 遺跡名 | 所在地 | 概 要 | 文 献 等 |
|----|----------------------|---------------|---|--|
| 23 | 寺家前遺跡 | 伊勢崎市中 下瀬名町 | 1～3号集中墓(6世紀前半から10世紀にかけての遺物の 投棄場) | 「寺家前遺跡 明神遺跡」 埴町教育委員会 1985 |
| 24 | 上瀬名遺跡 | 伊勢崎市中 上瀬名町 | 古墳時代の竪穴住居35軒。平安時代の竪穴住居4軒。中 世前期。溝、土坑、土坑墓等。 | 埴町文化財調査報告書「上瀬名遺跡」1～4次発掘調査 概要 埴町教育委員会 1980～1984 |
| 25 | 下瀬名・笠遺跡 | 伊勢崎市中 下瀬名町 | 近現代の土坑7基、溝状遺構1基。 | 昭和59年度埴町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書「笠 遺跡 古田遺跡」 埴町教育委員会 1985 |
| 26 | 上瀬名遺跡Ⅵ | 伊勢崎市中 上瀬名町 | 古墳時代の竪穴住居17軒、奈良・平安時代の竪穴住居57軒、 井戸1基、土坑16基、ビット124基。中近世の方形竪穴2軒、 溝6条、地下式坑1基、土坑1基。 | 伊勢崎市文化財調査報告書第184集「上瀬名遺跡Ⅵ」 伊勢崎市教育委員会 2008 |
| 27 | 上瀬名・雙見山古 墳 | 伊勢崎市中 上瀬名町 | 古墳時代後期の前方後円墳。石室は両袖型横穴式で、円 筒埴輪や形象埴輪などが出土している。「采女村11号墳」。 | 「埴町の遺跡」 埴町教育委員会 1986 「上毛古墳 総覧」1938 |
| 28 | 上瀬名・古田遺跡 | 伊勢崎市中 上瀬名町 | 古墳。馬具、耳環、鉄製武器具類などが出土。 | 昭和59年度埴町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書「笠 遺跡 古田遺跡」 埴町教育委員会 1985 |
| 29 | 東山道駅跡「牛加・ 矢ノ原ルート」 | 伊勢崎市中 伊与久 | 高崎市東部から太田市北西部で確認されている古代道路 状遺構。 | 「古代のみち」 群馬県立博物館 2001 |
| 30 | 三筆古墳群 | 伊勢崎市中 上瀬名町 | 6世紀前半代の古墳2基。 | 埴町教育委員会文化財調査報告書「三筆古墳群」 埴町教育委員会 1988 |
| 31 | 島海戸遺跡 | 伊勢崎市中 下瀬名町 | 平安時代以降の掘立柱建物7棟 | 埴町文化財調査報告書「土橋・三ツ古屋・出口・島 海戸遺跡」発掘調査概要 埴町教育委員会 1977 |
| 32 | 出口遺跡 | 伊勢崎市中 下瀬名町 | 古墳時代の竪穴住居53軒。方形周溝墓1基。祭祀遺構。 平安時代の竪穴住居8軒。掘立柱建物1棟。土坑2基、 井戸4基。溝3条。中世の溝5条。時期不明の土坑32基、 溝15条。 | 埴町文化財調査報告書「土橋・三ツ古屋・出口・島 海戸遺跡」発掘調査概要 埴町教育委員会 1977 |
| 33 | 土橋・三ツ古屋遺 跡 | 伊勢崎市中 下瀬名町 | 古墳から平安時代の竪穴住居57軒。方形周溝墓?1基。 掘立柱建物1棟。祭祀遺構1基。土坑、34基。井戸4基、 溝23条。 | 埴町文化財調査報告書「土橋・三ツ古屋・出口・島 海戸遺跡」発掘調査概要 埴町教育委員会 1977 |
| 34 | 采女小学校校庭遺 跡 | 伊勢崎市中 下瀬名町 | 古墳時代の竪穴住居2軒。 | 「埴町の遺跡」 埴町教育委員会 1986 「埴町古代 遺跡」 埴町役場 1978 |
| 35 | 土橋遺跡第5地点 | 伊勢崎市中 下瀬名町 | 古墳時代の竪穴住居7軒平安時代の竪穴住居3軒。時期 不明土坑7基、溝5条。 | 埴町文化財調査報告書「土橋遺跡第5地点」 埴町教 育委員会 1987 |
| 36 | 雷電神社古墳 | 伊勢崎市中 上瀬名町 | 円墳、横穴式。7世紀。 | 「埴町の遺跡」 埴町教育委員会 1986 「上毛古墳 総覧」1938 |
| 37 | 雷電裡遺跡 | 伊勢崎市中 上瀬名町 | 古墳時代の竪穴住居2軒。 | 「埴町の遺跡」 埴町教育委員会 1986 「埴町古代 遺跡」 埴町役場 1978 |
| 38 | 上瀬名裏神谷遺跡 | 伊勢崎市中 上瀬名町 | 古墳時代の竪穴住居16軒。円形周溝墓。溝16条、井戸1基、 土坑4基、As-B下水田。 | (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第124 集「上瀬名裏神谷遺跡 三室間ノ谷遺跡」1991 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 39 | 上瀬名神谷遺跡 | 伊勢崎市中 上瀬名町 | 旧石器時代のナイフ形石器。縄文時代の爪形文土器。摺 糸文土器、局部磨製石斧。奈良・平安時代の上師器・須 恵器等。 | 「埴町史」第三巻 歴史編上 1996 埴町「埴町 の遺跡」1986 埴町教育委員会 |
| 40 | 十三塚遺跡 | 伊勢崎市中 伊与久 | 旧石器時代の黒曜石制尖頭器。古墳時代の竪穴住居、奈良・ 平安時代の竪穴住居、掘立柱建物、基礎建物、柱穴列、土塁、 寺院跡。 | (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第134 集「史跡「十三塚遺跡」 1992 (財)群馬県埋蔵文化 財調査事業団「埴町史」第3巻 歴史編上 埴町 教育委員会 1996 |
| 41 | 伊与久遺跡 | 伊勢崎市中 日乃出町 | 古墳時代の竪穴住居1軒。ビット状遺構1基。 | 埴町文化財調査報告書「伊与久遺跡」 埴町教育委員 会 1973 「埴町古代遺跡」 埴町役場 1978 |
| 42 | 天神山古墳 | 伊勢崎市中 上武士 | 剛志村30号墳。武士の四つの丘陵の中で最も高い丘の頂 上に造られた前方後円墳。形象埴輪が数多く出土。6世 紀末から七世紀初頭。 | 「埴町史 第3巻歴史編上」 埴町 1996 |
| ① | 瀧名古墳群 | 伊勢崎市中 上瀬名町 | 6から7世紀代の古墳群 | 「上毛古墳総覧」 群馬県 1938 |
| ② | 下瀬名古墳群 | 伊勢崎市中 下瀬名町 | 13基を調査。円墳12基、方墳1基。五世紀後半に形成さ れた古墳群。 | (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第124 集「下瀬名塚越遺跡」1991 (財)群馬県埋蔵文化財 調査事業団 |
| ③ | 武士古墳群 | 伊勢崎市中 上武士町 | 天神山古墳(剛志村第30号墳)前方後円墳6世紀末。剛志 村第33号墳 円墳7世紀初頭。剛志村第36号墳 円墳7 世紀前半。 | 「埴町の遺跡」 埴町教育委員会 1986 「埴町古代 遺跡」 埴町役場 1978 |

【参考文献】

- 「埴町史 第1巻自然編」「埴町史 第3巻歴史編上」 埴町 1996 「上瀬名遺跡Ⅵ」 伊勢崎市教育委員会 2008
「埴町の遺跡」 埴町教育委員会 1986 「群馬県史 通史編」 群馬県 1990
「埴町古代遺跡」 埴町役場 1978年 「伊勢崎市史 自然編」 伊勢崎市 1987
「下瀬名遺跡12」 伊勢崎市教育委員会 2010

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 遺跡及び調査の概要

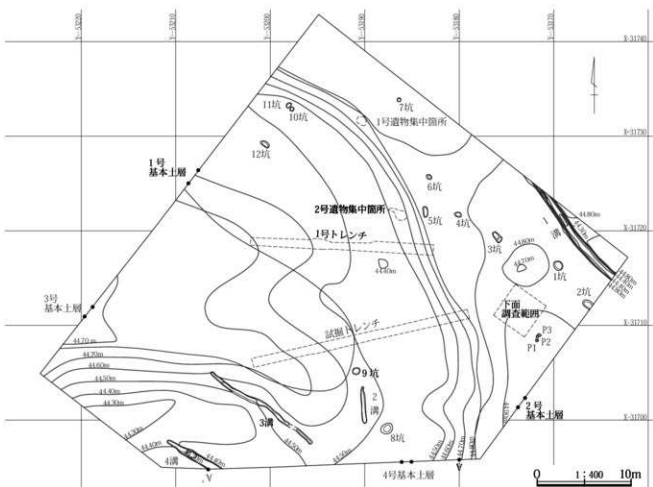
遺跡は、群馬県の南東部に位置する伊勢崎市境木島に所在し、地形的には周辺を流れる粕川や広瀬川、早川などの河川の影響を受けた微高地と低地が複雑に入り組み形成された伊勢崎台地上に立地する。

検出された遺構は、概ね古墳時代から近世に帰属するものと考えられる。遺構は土坑12基、ピット3基、溝4条が検出されており、また遺物が集中して出土した場所が2箇所検出されている。

調査は試掘による土層観察結果を踏まえて、微高地部では基本土層Ⅶ層上面を、低地部ではⅨ層のHr-FA上面まで掘り下げて調査を行った。調査区は北側と西側の一部が微高地となる。西側の微高地からは遺構は検出されなかったが、北側からは1号から7号土坑、1号から3

号ピット、1号溝などの遺構が検出された。低地部で検出された遺構は8号から12号土坑、2号から4号溝などである。4号溝以外の遺構は微高地部で検出されたものよりは古い遺構である。土坑やピットからは遺物が出土しておらず、明確な時期を判断できるものはない。そのため埋没土を基本土層と照らし合わせて、時期を古墳時代から近世と推定した。溝は1号・4号溝から近世の遺物が出土しており、埋没土からも近世に帰属するものと考えられる。2号・3号溝は併伴する遺物がなかったため明確な時期は判断できない。北側低地部縁辺部の2箇所から古墳時代の土器片が集中して出土した。周辺を精査したが、掘り込んだ痕跡は見られなかったため遺物集中箇所として遺物の検出を行った。

土層観察用の断面では確認されていなかったが南西壁を精査中に、As-Bの一次堆積層が確認された。水田遺構



第7図 遺跡全体図

の存在が想定されたため、南西壁周辺に調査範囲を設定しAs-Bを除去し確認調査を行ったが、調査範囲も僅かであったため、水田遺構とする確証は得られなかった。しかし、As-B下には黒色土の存在が認められ水田の可能性が否定できないことから、自然科学分析をおこない、分析結果から検証することとした。(詳細な分析は第4章参照)その結果、イネのプラント・オパールが1gあたり5,900個/gと高い値で検出された。このことから、本遺跡南側から南東部にかけては水田遺構が展開する可能性が高いと考えられる。

第2面は、下層面調査として微高地部、低地部それぞれにトレンチを設定し調査を行った。しかし、河川氾濫か洪水起源と考えられる層が厚く堆積しており、文化層の存在は確認できなかった。旧石器調査においても、旧石器時代相当面まで掘り下げて調査を行うことができなかったため、旧石器の有無については明確にできなかった。

それぞれの遺構からは共存する遺物が少なく、詳細な時期は断定できないため、出土遺物のない遺構は埋没土を基本土層と照らし合わせ以下のように分類し、大まかな時期を断定した。

- ①はHr-FAで埋没。Hr-FA一次堆積層が埋没土に見られ6世紀以前のもと考えられる。
- ②はシルト質土主体の土に、Hr-FA塊・粒を混入する基本土層Ⅷ層及びⅧ'層相当の土で埋没。6世紀以後As-B降下以前と考えられる。
- ③は褐灰色土に、鉄分沈着やを混入するもので基本土層Ⅶ層である。②と類似するシルト質の土で、時期は②

と同じAs-B降下以前と考えられる。

④は締まりの弱い粗粒砂質土やAs-B混土を混入する褐色土であり、基本土層Ⅲ層、Ⅳ層相当の土である。これらの土で埋没している1号溝や4号溝からは中近世の陶磁器等が出土している。このことから、中近世に相当すると考えられる。

本遺跡の遺構時期は明確なものが少ないため、以下には時代ごとではなく遺構ごとに記載し、それぞれの遺構の特徴を述べる。なお、遺構の出土位置、規模などの計測値については第6・7・8表に一覧として掲載してあるので参照されたい。

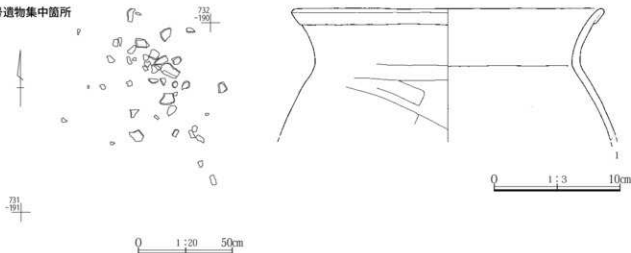
第2節 遺物集中箇所

(第8・9・24図、PL1・2・7)

1号遺物集中箇所は調査区北部、座標値721-185に位置する。遺物は微高地と低地の境の約10m四方の範囲、低地部基本土層のX層(As-C混土)中から出土した。出土した遺物は60点の土器片である。この土器片は土師器甕で接合・復元の結果、第8図1のような状態になったが、うち36点(297g)は接合には至らなかった。

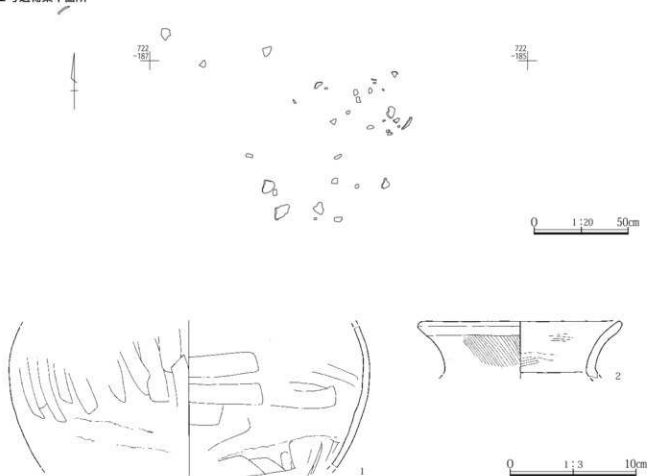
2号遺物集中箇所は1号遺物集中箇所から南東へ約10mほど離れた調査区南東部、座標値731-189に位置する。遺物は1号遺物集中箇所と同様に低地部縁辺から出土した。出土した遺物は65点の土器片である。この土器片は土師器甕で接合・復元の結果、第9図1の胴部が主体であるが、第9図2の口縁部も見られた。なお、出土した土器片のうち、44点(252g)は接合には至らなかった。

1号遺物集中箇所



第8図 1号遺物集中箇所と出土遺物

2号遺物集中箇所



第9図 2号遺物集中箇所と出土遺物

第3節 土坑 (第10図, PL. 2・3・4)

土坑は12基検出した。遺物を伴う遺構がないことから土坑埋没土を、第1節で掲げた①から④に照らし合わせ時期別に分類し以下に記す。

8号土坑の上層は褐灰色土(Hr-FA塊を含むシルト質土)層であり、下層はHr-FA一次堆積層である。このことから①の時期と考えたが、遺構の構築面はHr-FA堆積後構築されたと考えられ②の時期の可能性もある。また、これらのHr-FAなどの堆積物が自然な落ち込み部に堆積した可能性も否定できない。

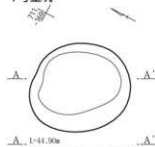
9号・10号・11号・12号土坑はHr-FA塊・粒を含む基本土層Ⅷ層及びⅦ層で埋没しているものである。これらの土坑は、底面付近だけを検出したものであるため明確な規模は不明であるが、埋没土から②の時期と考えられる。

1号・6号土坑は細粒白色軽石を含む基本土層Ⅶ層を主体とする土で埋没しているものである。これらの土坑は微高地部から検出されている。時期は埋没土から②の時期に近いと考えられるが埋没土にHr-FA塊・粒が見られないため③の時期と考えられる。

2号・3号・4号・5号・7号土坑はAs-B混土や粗粒砂質土を含む基本土層のⅢ層及びⅣ層で埋没しているものである。3号土坑においては底面から河原礫5点が出土している。これらの石には人為的に配置した規則性は見られないことから、投棄されたものと考えられる。底部の10cmから15cm上から湧水が見られたため井戸とも考えられたが、平面・断面形状から井戸と断定するには至らなかったため土坑とした。これらの土坑の時期は埋没土から④の時期と考えられる。

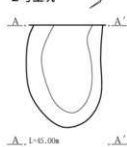
土坑の埋没状況はいずれも自然埋没であり、人為的や短期間に埋没したと考えられるものは見られなかった。

1号土坑



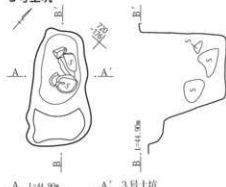
1. 褐灰色土(10YR5/1) 洪水層
シルト塊、細粒白色軽石、酸
化鉄塊を含む。締まり弱い。

2号土坑



1. 暗褐色土(10YR3/3) 細粒
白色軽石を全体に含む。

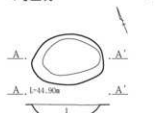
3号土坑



3号土坑

1. 褐色土(10YR4/4) 砂質土主体。褐
色土粘土塊を少量含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3) 褐色土粘質土
と砂質土の混合土。
3. 褐灰色土(10YR6/1) 褐灰色粘質土
主体。僅かに砂質土を含む。

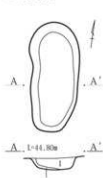
4号土坑



4号土坑

1. 褐色土(10YR4/4)
細粒白色軽石を全体に含む。鉄分
凝集塊を含む。締まり弱い。

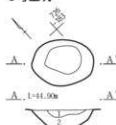
5号土坑



5号土坑

1. 褐色土(10YR4/4)
褐色土粘質土塊を含
む。細粒白色軽石を
少量含む。
2. 褐灰色土(10YR6/1)
鉄分凝集塊を少量含
む。締まり弱い。

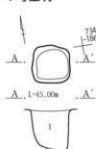
6号土坑



6号土坑

1. 褐灰色土(10YR5/1)
細粒の軽石を全体に
含む。鉄分塊を多量に
含む。締まり弱い。

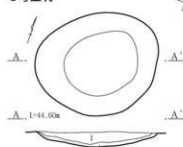
7号土坑



7号土坑

1. 褐色土(10YR4/4)
細粒白色軽石を全体に
含む。締まり弱い。

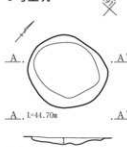
8号土坑



8号土坑

1. 褐灰色土(10YR6/1) Hr-FA小塊を
少量含む。粘質土。
2. 黄褐色土(10YR8/6) Hr-FA主体。

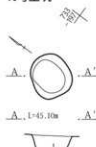
9号土坑



9号土坑

1. 褐灰色土(10YR6/1)
Hr-FA小塊を少量含む。
粘質土。

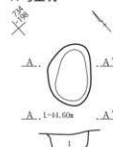
10号土坑



10号土坑

1. にぶい黄褐色土(10YR6/4)
Hr-FA塊、黒色土塊を少量
含む。粘質土。

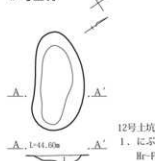
11号土坑



11号土坑

1. にぶい黄褐色土(10YR6/4)
Hr-FA塊、黒色土塊を少量
含む。粘質土。

12号土坑



12号土坑

1. にぶい黄褐色土(10YR6/4)
Hr-FA塊、黒色土塊を少量含む。粘質土。

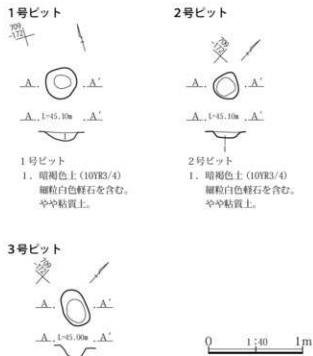


第10図 1号から12号土坑

第4節 ピット (第11図、PL. 4・5)

ピットは調査区東側の微高地部で3基を検出した。これらのピットは比較的近い位置に分布している。土坑と同様に遺物は出土していないため、明確な時期は判断できない。

埋没土の分類で見ると、3基とも粗粒砂質土を含む基本土層のⅢ層で埋没しており、時期は④の時期に相当するものと考えられる。掘り込みも浅く、壁の立ち上がりも緩やかであり、特徴ある形状は見られない。



第11図 1号から3号ピット

第5節 溝 (第12・13図、PL. 5・6・7)

溝は微高地部で1条、低地部で3条を検出した。1号溝と4号溝から陶磁器等の遺物が出土している。2号溝と3号溝からは遺物の出土は見られない。出土位置や規模等の計測値は第8表を参照されたい。以下に各溝の概要を記す。

1号溝は調査区東側の微高地部で検出した。低地部の左岸にほぼ平行する。埋没土は上層に基本土層のⅢ層が堆積し、中位から下位にかけては細粒白色軽石を含む褐色土が主体となる。砂質土や細粒砂などの水流の痕跡とされる土層は、断面底部からは確認できなかった。検出

状況から、低地左岸に平行しながら南東方向に延びると想定できる。壁は垂直気味に立ち上がり、検出した溝の中で最も良好な形状で残存している。底面はほぼ平坦であり、勾配は見られない。北西方向から南東方向へ走向すると考えられる。遺物は中世の青磁碗破片が底部付近から出土している。埋没土や出土遺物から、中世に帰属するものと考えられる。他に時期的に合わない土師器壘1点、土師器環1点、須恵器環1点(105g)が出土しているがこれらは未掲載である。

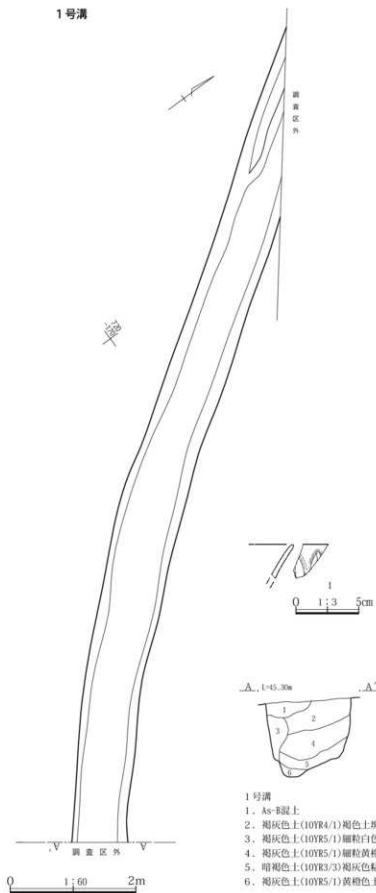
2号溝は調査区南側の低地部内湾曲部で検出した。底面部のみの検出であり、実際の構築面や規模、形状は不明である。底面部埋没土はHr-FA塊を含む褐色粘質土である。砂質土や細粒砂などの水流の痕跡とされる土層は、断面底部からは確認できなかった。検出範囲が僅かであるため、溝の性格などは不明である。南から北へ走向する。遺物は出土していないが、底部埋没土にHr-FA塊が見られることから②の時期に相当すると考えられ、As-B降下前のもと考えられる。

3号溝は調査区南側の低地部湾曲部の北側斜面にほぼ平行する。底面部のみの検出であり、実際の構築面や規模、形状は不明である。埋没土はHr-FA塊・粒を混入する褐色粘質土である。遺物は出土していないが、底部埋没土にHr-FA塊が見られることから②層の時期に相当すると考えられ、As-B降下前のもと考えられる。

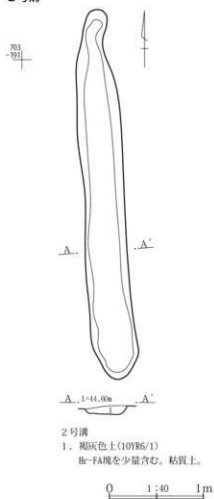
4号溝は調査区南側の低地部の低い部分で検出した。検出は底面部のみであったが、南壁の断面で上面から掘り込んだ構築状態が確認された。この断面から見ると、構築面は少なくとも現代耕作土下である基本土層Ⅲ層を掘り込んでいる。断面形状は両壁は緩やかに立ち上がり、底部はほぼ平坦である。南壁の土層断面から実際の形状は、幅4m、深さ80cmの大きなものと考えられる。埋没土は粗粒砂質土主体である。砂質土や細粒砂などの水流の痕跡とされる土層は、断面底部からは確認できなかった。勾配はなくほぼ平坦であるが、北西方向から南東方向へ走向すると考えられる。遺物は近世の肥前陶器器手碗と砥石が出土している。埋没土の分類から見ると④層が主体であり、遺物も近世陶磁器が出土していることから近世に帰属するものと考えられる。

他に時期的に合わない土師器細片4点、須恵器壘片1点(105g)が出土しているがこれらは未掲載である。

1号溝



2号溝



A-A' t=11.60m

2号溝

1. 褐灰色土(10YR6/1)
Br-FA塊を少量含む。粘質土。



1号溝

1. As-B混土
2. 褐灰色土(10YR4/1)褐色土塊を上面に含む。粘質土。粘り強い。
3. 褐灰色土(10YR5/1)細粒白色軽石を少量含む。粘質土。
4. 褐灰色土(10YR5/1)細粒黄褐色土粒を少量含む。粘質性強い。
5. 暗褐色土(10YR3/3)褐灰色粘土塊を含む。粘り弱い。
6. 褐灰色土(10YR5/1)黄褐色土塊を含む。やや粘質土。

第12図 1号・2号溝と1号溝出土土物

3号溝

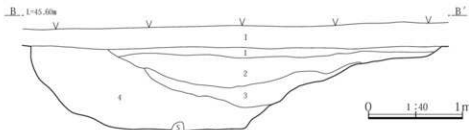
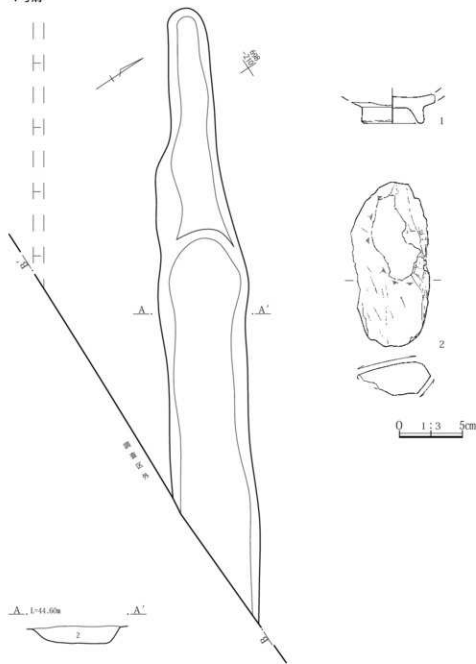


3号溝

1. 褐色土 (10YR6/1) Hr-FA塊を少量含む。粘質土。



4号溝



4号溝

1. 褐色土 (10YR6/1) 鉄分沈着 (床上) を多く含む。砂質土。
2. 褐色土 (10YR5/1) 砂粒白色軽石、褐色粘質土塊少量含む。締まり弱い。
3. 褐色土 (10YR6/1) 砂粒白色軽石を全体に含む。褐色粘質土塊、3層褐色土塊を少量含む。
4. 暗褐色土 (10YR3/3) 粗粒砂質土を多く含む。締まり弱い。

第13図 3号・4号溝と4号溝出土遺物

第2表 1号遺物集中箇所 出土遺物観察表(土器)

| 挿図番号 P.L.番号 | No. | 種 器 類 種 | 残存率 | 計測値(cm) | | | 胎土/焼成/色調 | 成形・整形の特徴 | 備 考 |
|----------------|-----|------------------|-------------|-----------|---|---|------------------|------------------------------------|------|
| 第8図 Pl. 7 | 1 | 土師器 甕 | 口縁部から 胴部 | 口 24.0 | — | — | 細砂粒/良好/に ぶい黄橙 | 折り返し口縁。口縁部横ナデ。胴部 外面斜位ヘラナデ、内面ナデ。 | 古墳時代 |

第3表 2号遺物集中箇所 出土遺物観察表(土器)

| 挿図番号 P.L.番号 | No. | 種 器 類 種 | 残存率 | 計測値(cm) | | | 胎土/焼成/色調 | 成形・整形の特徴 | 備 考 |
|----------------|-----|------------------|------|-----------|---|---|----------------------|------------------------------------|--------------------|
| 第9図 Pl. 7 | 1 | 土師器 甕 | 胴部片 | — | — | — | 粗砂粒/細砂粒/良 好/にぶい黄橙 | 胴部外面ハケ状工具による縦位ナデ。 内面横位。斜位ナデ。 | 胴部下半面に接 合痕 古墳時代 |
| 第9図 Pl. 7 | 2 | 土師器 甕 | 口縁部片 | 口 15.6 | — | — | 細砂粒・石英/良好 /にぶい黄橙 | 口縁部外面ハケ目(1cmあたり5本) 後横ナデ。内面ヘラナデ。 | 古墳時代 |

第4表 1号溝 出土遺物観察表(陶磁器)

| 挿図番号 P.L.番号 | No. | 種 器 類 種 | 残存率 | 計測値(cm) | | | 色調 | 成形・整形の特徴 | 備 考 |
|----------------|-----|------------------|------|---------|---|---|----|----------|-------------------|
| 第12図 Pl. 7 | 1 | 龍泉窯系 青磁碗 | 口縁部片 | — | — | — | 灰白 | 外面筋違弁文。 | 森田・横田分類 1-5b類。 |

第5表 4号溝 出土遺物観察表(陶磁器・石製品)

| 挿図番号 P.L.番号 | No. | 種 器 類 種 | 残存率 | 計測値(cm) | | | 色調 | 成形・整形の特徴 | 備 考 |
|----------------|-----|------------------|------|-------------|-----------|----------|---|-------------------------|---------|
| 第13図 Pl. 7 | 1 | 肥前陶器 只器碗 | 底部 | — | 底 4.2 | — | 灰白 | 高台端部を除き。細かい買入の入る 灰釉。 | 17世紀後半。 |
| 挿図番号 P.L.番号 | No. | 器種・ 形態・素材 | 出土位置 | 長・高 (cm) | 幅 (cm) | 重 (g) | 成形・整形の特徴 | | 石 材 |
| 第13図 Pl. 7 | 2 | 砥石 | 埋没土 | 13.0 | (6.0) | 239.6 | 二面使用。背面側右辺には刀子状工具による整形痕が残る。 裏面側は黒く覆け被熱破損しているが、破損面は部分的に 摩耗しており、破損後の使用は明らか。 | | 流紋岩 |

第6表 土坑計測表

| 調査区 | 面 | No. | 位置 | 長軸(m) | 短軸(m) | 深さ(m) | 方位 | 形態 |
|-----|---|-----|---------|--------|-------|-------|---------|-----|
| 1 | 1 | 1号 | 710-619 | 1.03 | 0.9 | 0.12 | — | 円形 |
| 1 | 1 | 2号 | 713-166 | (1.07) | 0.75 | 0.15 | N-57°-W | 楕円形 |
| 1 | 1 | 3号 | 720-176 | 1.25 | 0.55 | 0.83 | N-39°-W | 長方形 |
| 1 | 1 | 4号 | 722-180 | 0.75 | 0.55 | 0.13 | N-63°-W | 楕円形 |
| 1 | 1 | 5号 | 723-185 | 1.15 | 0.5 | 0.14 | N-8°-W | 楕円形 |
| 1 | 1 | 6号 | 726-183 | 0.6 | 0.5 | 0.23 | N-50°-W | 楕円形 |
| 1 | 1 | 7号 | 734-186 | 0.42 | 0.42 | 0.43 | N-14°-E | 方形 |
| 1 | 1 | 8号 | 700-187 | 1.3 | 1.1 | 0.15 | — | 円形 |
| 1 | 1 | 9号 | 706-191 | 0.85 | 0.73 | 0.08 | — | 円形 |
| 1 | 1 | 10号 | 733-197 | 0.45 | 0.4 | 0.23 | — | 円形 |
| 1 | 1 | 11号 | 734-198 | 0.65 | 0.48 | 0.2 | N-49°-E | 楕円形 |
| 1 | 1 | 12号 | 730-201 | 1.03 | 0.53 | 0.1 | N-48°-W | 楕円形 |

第7表 ビット計測表

| 調査区 | 面 | No | 位置 | 長軸 (m) | 短軸 (m) | 深さ (m) | 方位 | 形態 |
|-----|---|----|---------|-----------|-----------|-----------|---------|-----|
| 1 | 1 | 1号 | 710-619 | 1.03 | 0.9 | 0.12 | — | 円形 |
| 1 | 1 | 2号 | 713-166 | (1.07) | 0.75 | 0.15 | N-57°-W | 楕円形 |
| 1 | 1 | 3号 | 720-176 | 1.25 | 0.55 | 0.83 | N-39°-W | 長方形 |

第8表 溝計測表

| 調査区 | 面 | No | 位置 | 長さ (m) | 幅 (m) | 深さ (m) | 方位 | 走向 | 勾配 |
|-----|---|----|-------------------|-----------|------------------|-----------|---------|-------|-------|
| 1 | 1 | 1号 | 715-163 ~ 725-172 | 6.5 | 最大0.50 最少0.45 | 0.8 | N-35°-W | 北西→南東 | 0.24% |
| 1 | 1 | 2号 | 695-189 ~ 703-190 | 3.9 | 最大1.0 最少1.0 | 0.1 | N-4°-W | 北→南 | 1.28% |
| 1 | 1 | 3号 | 695-195 ~ 705-206 | 13.18 | 最大0.53 最少0.30 | 0.08 | N-53°-W | 北西→南東 | 0.36% |
| 1 | 1 | 4号 | 695-205 ~ 698-209 | (6.0) | 最大0.85 最少0.45 | 0.18 | N-61°-W | 北西→南東 | 0.33% |

第6節 As-B下面及び下層面調査

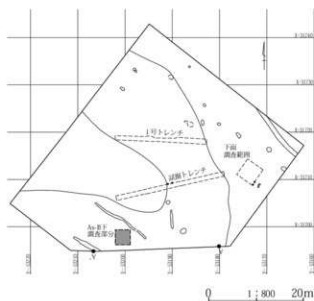
県文化財保護課試掘トレンチではAs-B混土は見られたが、As-B一次堆積層は確認されていなかった。このため低地部の調査においては、洪水層シルト質土下のHr-FA上面まで掘削機械で掘り下げて遺構確認を行った。しかし、南壁の断面精査においてAs-B一次堆積層とその下の黒色土層の存在が確認されたため、南壁周辺の一部の範囲についてAs-B上面まで掘り下げ、さらにAs-Bを除去して黒色土面での遺構確認を行った。その結果、水田が存在したという直接的な証拠は得られなかったが、自然科学分析結果から水田の存在を推定するに十分な量のイネのプラント・オーバーが検出された。

このAs-B一次堆積層は、南方向に広がるものと考えられたが、引き続き調査が行われた南に隣接する上武士・堀北遺跡調査においてはAs-Bの一次堆積層は確認されなかったことから、面的な広がりを検証することができなかった。水田耕土の可能性が高いと考えられるが、水田の存在を断定することはできなかった。

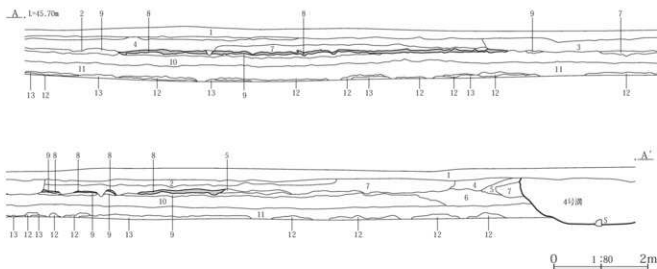
最終の確認面として、微高地部と低地部の2箇所にトレンチを設定して下面の調査を実施した。微高地部には4×4mの範囲で深掘りをし、基本土層XI層の灰白色土面まで下げて調査を行ったが、遺物、遺構は検出できな

かった。低地部は幅1mのトレンチを東西方向に入れ下面調査を行った。また文化財保護課試掘トレンチの下面を掘り下げAs-C混土下の基本土層XI層下まで調査を行った。しかし、填砂が断面において確認されたほかは遺構、遺物は検出されなかった。

微高地も低地も洪水起源のシルト土が厚く堆積しており、また湧水レベルも高いため、旧石器調査はXI層下まで精査をすることができなかった。



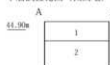
第14図 As-B下調査部分び下層面調査トレンチ位置図



南壁断面 A-A' (第14図参照)

1. 表土 現代耕作土
2. 褐色土(10YR4/4)耕作土床上。鉄分沈着層主体。
3. 褐色土(10YR4/6)粗粒砂質土主体。締まりない。
4. にぶい黄褐色土(10YR5/3) As-B混土。細粒白色軽石を全体に含む。やや締まりあり。
5. 褐色土(10YR4/4) As-B混土。黒色粘質土塊を含む。
6. 褐色土(10YR4/4) As-B混土。灰白色シルト塊を少量含む。
7. 黒褐色土(10YR2/3) As-B混土。黒色粘質土塊を全体に含む。粘質土。As-B堆積層。
8. 黒褐色土(10YR3/1)黒褐色粘質土主体。(B下水田面?)
10. 灰白色土(10YR5/1)洪水起源によるシルト主体。
11. 褐灰色土(10YR6/1)洪水起源によるシルト主体。下層にBr-FA塊を少量含む。
12. にぶい黄褐色土(10YR7/3) Br-FA塊を多量に含む。粘質土。
13. 黒色土(10YR2/1) As-C混土

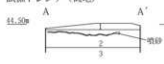
下層調査範囲(微高地)



下層面調査トレンチ(微高地)

1. 灰白色土(10YR8/1)洪水起源の上。粘質性強い。
2. 灰白色土(10YR8/1)砂質土を含み、締まり弱い。洪水起源の上。

試掘トレンチ(低地)



試掘トレンチ下層(低地)

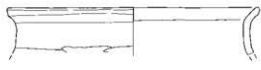
1. 黒色土(10YR2/1) As-C混土。粘質土。
2. 灰白色土(10YR8/1)洪水起源の上。鉄分塊を少量含む。粘質土。

第15図 南壁・下層調査範囲・試掘トレンチ

第7節 遺構外出土遺物(第16・25図、PL. 7)

本遺跡は遺構も少なく、遺構から検出されている遺物も僅かである。遺構外から出土した土器は、土師器壺か甕片が16点、土師器杯片2点、須恵器杯か椀片1点(135g)である。このうち掲載遺物は第16図1のみであり、その他は未掲載である。

また、調査前の原文化財保護課の試掘で、縄文時代中期の土器片が2点出土している。



第16図 遺構外出土遺物



第9表 遺構外出土遺物観察表(土器)

| 挿図番号 P.L.番号 | No. | 種類 器種 | 残存率 | 計測値(cm) | | | 胎土/焼成/色調 | 成形・整形の特徴 | 備考 |
|----------------|-----|-----------|-----|-----------|---|---|--------------|----------------------|-----|
| | | | | 口 | 底 | 高 | | | |
| 第16図 PL. 7 | 1 | 土師器 甕片 | 口縁部 | 口 19.6 | - | - | 細砂粒/良好/にぶい黄橙 | コ字状口縁で口縁部横ナデ彫削部ヘラ削り。 | 9世紀 |

第4章 自然科学分析

木島・下久保遺跡では発掘調査中に、火山灰分析と植物珪酸体分析の自然科学分析を委託して行った。その目的は次のとおりである。

①本遺跡は洪水起源の層が厚く堆積している。また、遺構からは遺物が出土していないため遺構の時期が不明瞭である。時期を判断する資料とすることを目的として、一次堆積層であるAs-B層とHr-FA層を同定し、層序指標を作るため火山灰分析を行った。

②発掘調査で南側断面よりAs-Bの一次堆積層が確認された。この層は試掘でも確認されていなかったため、As-B残存状況が良好な部分を一部調査したが、水田と認められるような痕跡はわからなかったため、調査地点の土地利用を検討する資料を得るため土壌の植物珪酸体分析を行った。

これらの分析は株式会社火山灰考古学研究所に委託した。分析結果は以下の通りである。



第17図 自然科学分析試料採取地点位置図

第1節 木島・下久保遺跡における火山灰分析

1. はじめに

関東地方北西部に位置する伊勢崎市域とその周辺に分布する後期更新世以降の地層や土壌の中には、赤城、榛名、浅間のほか、さらに遠方の火山に由来するテフラ(火山砕屑(さいせつ)物、いわゆる火山灰)が数多く含まれている。テフラの中には、すでに層位や噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、それらとの層位関係を明らかにすることで、遺構や遺物包含層の層位や年代に関する資料を得ることが可能となっている。

木島・下久保遺跡の発掘調査でも、層位や年代が不明な土層が検出されたことから、地質調査を行って土層の層序やテフラの層相に関する記載を行うとともに、採取された試料についてテフラ検出分析と火山ガラスの屈折率測定を行って、土層の層位や年代に関する資料を得ることになった。調査分析の対象となったのは、南壁東寄り深掘地点および西壁深掘地点である。

2. 土層の層序

(1) 南壁東寄り深掘地点

南壁東寄り深掘地点では、谷を埋めた厚い腐植質土壌の断面を観察できた(図18)。ここでは、下位より黒泥層(層厚12cm)、灰色粗粒火山灰混じり黒色泥層(層厚4cm)、黒褐色泥層(層厚5cm)、黒泥層(層厚3cm)、粒径が揃いない黄色粗粒火山灰層(層厚3cm)、灰色泥層(層厚3cm)、黒灰色泥層(層厚1cm)、灰白色シルト層(層厚1cm)、灰色泥層(層厚12cm)、若干色調が暗い灰色泥層(層厚9cm)、灰色泥層(層厚16cm)、黒灰色泥層(層厚7cm)、黄灰色粗粒火山灰層(層厚4cm)、灰色シルト層(層厚1cm)、砂混じり暗灰褐色土(層厚12cm)、砂混じり灰褐色土(層厚11cm)、砂混じり黄灰色土(層厚3cm)、白色粗粒火山灰混じり灰色土(層厚16cm)が認められる(図18)。

これらのうち、黄灰色粗粒火山灰層は、層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B、荒牧, 1968, 新井, 1979)に同定される。

(2) 中央部試掘トレンチ

中央部試掘トレンチでは、下位より砂混じり暗灰色泥層(層厚11cm)、灰白色粗粒火山灰を多く含む暗灰褐色泥層(層厚7cm)、黒泥層(層厚10cm)、細粒の白色軽石混じり黄色粗粒火山灰層(層厚1cm、軽石の最大径4mm)が認められる(図19)。なお、灰白色粗粒火山灰を多く含む暗灰褐色泥層と、黒泥層の間には、地震に伴う流動化の痕跡(いわゆる噴砂)が形成されている。

(3) 西壁深掘地点

西壁深掘地点では、微高地部の土層の断面を観察できた(図20)。ここでは、下位より黄色軽石混じり灰色砂層(層厚40cm以上、軽石の最大径18mm)、砂混じり暗灰色泥層(層厚17cm)、砂混じり黄灰色泥層(層厚14cm)、砂混じり暗灰褐色泥層(層厚10cm)、黒泥層(層厚4cm)、灰色泥層(層厚16cm)、黒灰褐色土(層厚6cm)、砂混じり黄灰色土(層厚7cm)、灰色作土(層厚15cm)が認められる。

3. テフラ検出分析**(1) 分析試料と分析方法**

南壁東寄り深掘地点および西壁深掘地点において、土層の境にかからないように基本的に5cmごとに採取された試料のうちの17点を対象にテフラ検出分析を行い、指標テフラの降灰層準を求めた。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 砂分の量により試料6~10gを秤量し、超音波洗浄により泥分を除去。
- 2) 80℃で恒温乾燥。
- 3) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第10表に示す。南壁東寄り深掘地点では、試料25にスポンジ状に良く発泡した灰白色軽石(最大径2.0mm)やその細粒物である灰白色の軽石型ガラスが多く含まれている。その珓品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。試料22のテフラ層には、さほど発泡の良くない白色軽石(最大径4.9mm)や、その細粒物の白色軽石型ガラスが多く含まれている。その珓品には、角閃石や斜方輝石が認められる。

As-Bより上位の試料8から試料2にかけては、As-Bに

由来する淡褐色の軽石型ガラスが比較的多く含まれているが、試料2には、ほかに繊維束状やスポンジ状に発泡し、光沢をもつた白色の軽石や軽石型ガラスが少量含まれている。

中央部試掘トレンチでは、試料2にスポンジ状に良く発泡した灰白色軽石(最大径2.0mm)やその細粒物である灰白色の軽石型ガラスが多く含まれている。その珓品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。試料1のテフラ層には、さほど発泡の良くない白色軽石(最大径3.2mm)や、その細粒物の白色軽石型ガラスが多く含まれている。その珓品には、角閃石や斜方輝石が認められる。

微高地部に位置する西壁深掘地点でも、いずれの試料からも火山ガラスを検出できた。そのうち、試料23と試料13には比較的多くの火山ガラスが認められた。前者では透明の分厚い中間型や軽石型、後者では白色や透明の軽石型や中間型が含まれている。また、試料5には、スポンジ状に発泡した灰白色の軽石型ガラスが少量含まれている。

4. 屈折率測定**(1) 測定試料と測定方法**

指標テフラとの同定精度を向上させるために、西壁深掘地点の試料23に含まれる火山ガラスの屈折率を測定した。測定には、温度変化型屈折率測定装置(古澤地質社製MATOT)を利用し、テフラ検出分析後の試料から篩別して得られた1/8-1/16mmの火山ガラスを測定対象とした。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。西壁深掘地点の試料23に含まれる火山ガラス(30粒子)の屈折率(n)は、1.501-1.506である。

5. 考察

南壁東寄り深掘地点の試料25、中央部試掘トレンチの試料2、西壁深掘地点の試料5に含まれる灰白色軽石やその細粒物である灰白色の軽石型ガラスは、その岩相や重鉱物の組み合わせから、4世紀初頭に浅間火山から噴出したと推定されている浅間C軽石(As-C、荒牧、1968、新井、1979、友廣、1988、若狭、2000)に由来すると考えられる。

また、南壁東寄り深掘地点の試料22および中央部試掘トレンチの試料2が採取されたテフラ層は、層相、テフラ粒子の岩相、含まれる重鉱物の組み合わせから、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA:新井1979, 坂口1986, 早田1989, 町田・新井1992)に同定される。さらに、南壁東寄り深掘地点の試料2付近に降灰層準が考えられるテフラは、層位や軽石および火山ガラスの特徴から、1783(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A:荒牧1968, 新井1979)と推定される。

一方、微高地部で認められる黄色軽石混じり灰色砂層から採取された西壁深掘地点の試料23に含まれる火山ガラスは、その形態や色調さらに屈折率などから、浅間火山の軽石流期(荒牧1968)のテフラの可能性が高い。淘汰のよくない層相を考慮すると、試料が採取された堆積物はこの時期に発生した火山泥流堆積物と思われる。実際、本遺跡に近い旧境町域では、約1.5～1.65万年前に噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP:新井1962, 町田・新井1992, 2003)の噴火に伴う火砕流に関係した火山泥流堆積物や、一連の噴火の後に発生した火山泥流の堆積物が検出されている(早田, 2004)。

また、この試料には、若干高い火山ガラスも含まれていることから、榛名系や赤城系のテフラ粒子も混在している可能性がある。

6. まとめ

木鳥・下久保遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、火山ガラスの屈折率測定を実施した。その結果、微高地部では浅間軽石流期の軽石や火山ガラスを含む砂質の火山泥流堆積物が認められた。それを切って形成された谷は、少なくとも浅間C軽石(As-C, 4世紀初頭)、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)、浅間A軽石(As-A, 1783年)を挟む腐植質堆積物によって埋没している。

文献

- 新井房夫(1962)関東東地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
 新井房夫(1979)関東東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, №157, p.41-52.
 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質。地質研専報, №45, 65p.
 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
 町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス。東京大学出版会, 336p.
 坂口 一(1986)榛名二ツ岳起源FA・F層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
 早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312.
 早田 勉(2004)火山灰編年学からみた浅間火山の噴火史—とくに平安時代の噴火について—, p.45-56.
 友廣哲也(1988)古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p.325-336.
 若狭 徹(2000)群馬の弥生土器が戦わるとき。かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く—古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.

第2節 木島・下久保遺跡における プラント・オパール分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO₂)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石(プラント・オパール)となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで水田跡(稲作跡)の検証や探査が可能である(藤原・杉山, 1984, 杉山, 2000)。

2. 試料

南壁東寄り深堀地点から採取された試料1~3の3点である。試料採取層位を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)。
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)。
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理。
- 4) 超音波水中照射(300W・42kHz・10分間)による分散。
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去。
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成。
- 7) 検鏡・計数。

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10-5g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物

の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。

4. 分析結果

プラント・オパール分析では、イネ、ムギ類(穎の表皮細胞)、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な6分類群について同定・定量を行っている。分析結果を表1および図1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を写真図版に示す。

5. 考察

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山, 2000)。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

南壁東寄り深堀地点では、As-B直下層(試料1)、Hr-FA直下層(試料2)、As-C下層(試料3)について分析を行った。その結果、As-B直下層(試料1)からイネが検出された。密度は5,900個/gと高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。その他の試料では、イネは検出されなかった。

6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、南壁東寄り深堀地点のAs-B直下層では、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。その他の試料ではイネは検出されなかった。

文献

- 杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)、考古学と植物学、同成社、p.189-213。
藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(Ⅰ)-数種イネ科親縁植物の珪酸体標本と定量分析法-、考古学と自然科学、9、p.15-29。
藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(Ⅱ)-プラント・オパール分析による水田跡の探査-、考古学と自然科学、17、p.73-85。

第4章 自然科学分析

第10表 テフラ検出分析結果

| 地点名 | 試料 | 軽石・スコリア | | | 火山ガラス | | |
|-----------|----|---------|----|-----|--------|-----------|-------|
| | | 量 | 色調 | 最大径 | 量 | 形態 | 色調 |
| 南東壁北寄り深掘 | 2 | * | 白 | 2.8 | ** | pn | 淡褐, 白 |
| | 4 | | | | ** | pn | 淡褐, 白 |
| | 6 | | | | ** | pn | 淡褐 |
| | 8 | | | | ** | pn | 淡褐 |
| | 22 | * | 白 | 4.9 | *** | pn | 白 |
| | 25 | * | 灰白 | 2.0 | *** | pn | 灰白 |
| | 26 | | | | * | pn, bw | 透明 |
| 27 | | | | * | pn, bw | 透明 | |
| 中央部試掘トレンチ | 1 | ** | 白 | 3.2 | *** | pn | 白 |
| | 2 | * | 灰白 | 2.0 | *** | pn | 灰白 |
| 西壁深掘 | 5 | | | | * | pn | 灰白 |
| | 7 | | | | * | pn, nd/bw | 透明 |
| | 9 | | | | * | pn, nd/bw | 透明 |
| | 11 | | | | * | pn, nd | 透明 |
| | 13 | | | | ** | pn, nd | 白, 透明 |
| | 16 | | | | * | nd, pn | 透明 |
| | 23 | | | | ** | nd, pn | 透明 |

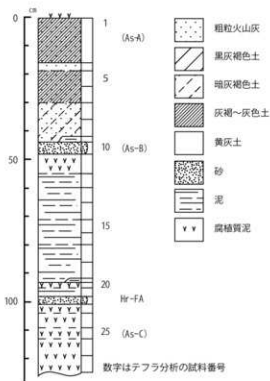
****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない, 最大径の単位は, mm.

bw: バブル型, nd: 中間型, pn: 軽石型.

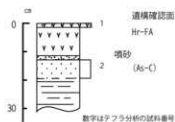
第11表 屈折率測定結果

| 地点名 | 試料 | 火山ガラス | |
|------|----|-------------|-----|
| | | 屈折率 | 粒子数 |
| 西壁深掘 | 23 | 1.501-1.506 | 30 |

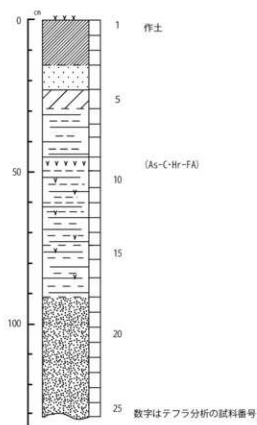
測定は温度変化型屈折率測定装置(MA10T)による。



第18図 南壁東寄り深掘地点の土層柱状図



第19図 中央部試掘トレンチの土層柱状図



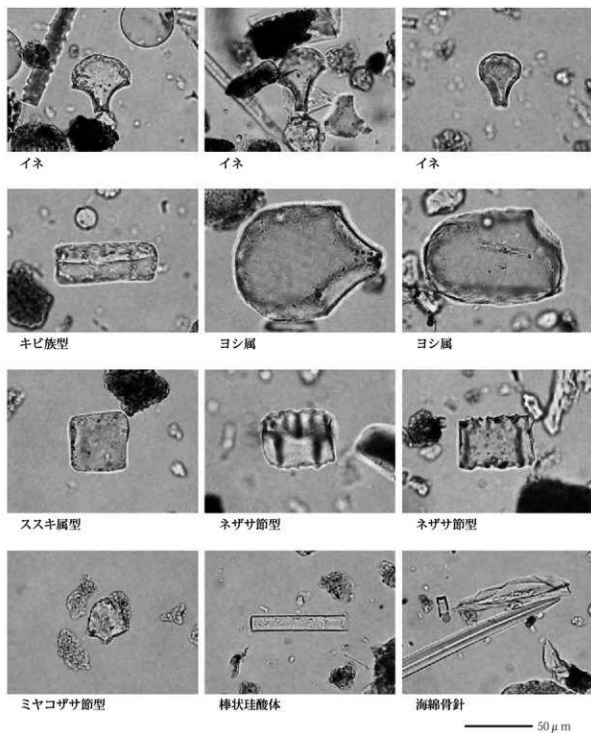
第20図 西壁深掘地点の土層柱状図

第12表 木島・下久保遺跡におけるプラント・オパール分析結果

| 検出密度(単位: $\times 100$ 個/g) | | 地点・試料 | | |
|----------------------------|------------------------|----------|----|----|
| 分類群 | 学名 | 南東壁北寄り深掘 | | |
| | | 1 | 2 | 3 |
| イネ | <i>Oryza sativa</i> | 59 | | |
| ヨシ属 | <i>Phragmites</i> | 74 | 38 | 45 |
| ススキ属型 | <i>Miscanthus</i> type | 37 | 23 | 23 |
| タケ亜科 | Bambusoideae | 29 | 53 | 38 |

推定生産量(単位: $\text{kg}/\text{m}^2 \cdot \text{cm}$): 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

| | | | | |
|-------|------------------------|------|------|------|
| イネ | <i>Oryza sativa</i> | 1.73 | | |
| ヨシ属 | <i>Phragmites</i> | 4.65 | 2.39 | 2.87 |
| ススキ属型 | <i>Miscanthus</i> type | 0.46 | 0.28 | 0.28 |
| タケ亜科 | Bambusoideae | 0.14 | 0.25 | 0.18 |



第21図 植物珣酸体(プラント・オパール)顕微鏡写真

第5章 調査の成果

木島・下久保遺跡では、二つの低地の合流点とその周囲の微高地上において、古墳時代から中・近世にかけての遺物集中箇所、土坑、溝、ピットを検出した(第22図)。いずれも居住域を構成するような遺構ではないことから、おそらくこの調査区域は居住域に隣接する低地とその縁辺にあたるものと考えられる。

一方、低地部の一部には天仁元年(1108)に降下した浅間B軽石(As-B)及び、5世紀末から6世紀初頭に降下した榛名ニッ岳渋川テフラ(Hr-FA)がそれぞれ一次堆積層として検出されたものの、遺構として水田を確認することはできなかった。しかし、自然科学分析の結果、一部の層位においては高い値のイネのプラント・オパールが検出され、低地部では水田耕作が行われた可能性が高いことが判明した。

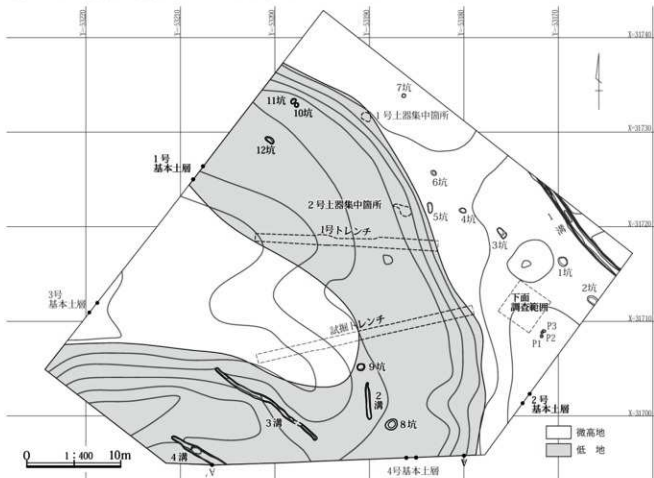
したがって、ここでは確認したテフラから主として低地部における各層位の年代を明らかにした上で、イネの

プラント・オパール分析結果及び検出した遺構・遺物を総合的に判断して、この調査区域の性格について検討してみたい。

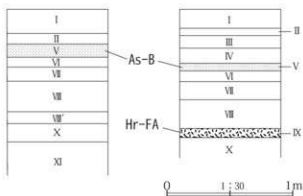
1 低地の層位と年代

4号基本土層において、V層はAs-Bの一次堆積層で、IX層はHr-FAの一次堆積層である(第23図)。また、X層の黒色土中には、3世紀後半以降に降下した浅間C軽石(As-C)を含んでいる。これらのことから、VI層の上面は平安時代の1108年、X層の上面は古墳時代後期の5世紀末から6世紀初頭であると判断できる。また、X層の黒色土にはAs-Cを含んでいることから、3世紀後半以降で5世紀末以前と判断できる。

なお、As-Bは低地部の最上部である1号基本土層においても検出されていることから(第23図)、合流する2条の低地部には、一部に覆押を受けていたものの、ほぼその全面にAs-Bが堆積していたものと考えられる。



第22図 遺跡全体図



第23図 1号・4号基本土層

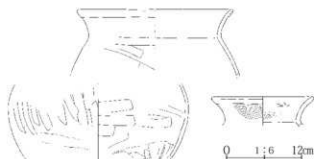
2 低地部における水田耕作とその継続性

4号基本土層地点において、As-B直下のVI層、Hr-FA直下のX層上位、As-Cを含むX層下位の3点について、プラント・オパール分析を行った。この結果、VI層からは5,900個/gのイネのプラント・オパールが検出されたが、他のX層上位、X層下位からはいずれもイネのプラント・オパールは皆無であった(23頁「木島・下久保遺跡におけるプラント・オパール分析」参照)。

これらのことから、この低地部では遺構としての水田は確認できなかったが、少なくともVI層については水田耕作が行われた可能性が高い。また、古墳時代後期の5世紀末～6世紀初頭に比定できるX層上位及び、3世紀後半以降で5世紀末以前に比定できるX層下位については、この低地部における水田耕作の可能性は極めて低いものと考えられる。

一方、この遺跡においては微高地の縁辺部2箇所から、遺構を伴うことなく土師器壺が出土している(第24図、本編11頁「遺物集中箇所」参照)。これらは、折返した口縁部及び頸部のハケ目の特徴及び膨らんだ胴部の状況から、いずれもAs-C降下以降で古墳時代前期の4世紀代に比定できる土器群と考えられる。したがって、古墳時代後期のHr-FA直下層においては水田耕作の可能性は極めて低いものの、古墳時代前期については周辺の低地部において水田耕作が行われた可能性が高い。

また、遺構外ではあるが土師器壺が出土している(第25図)。この土師器壺は「コ」の字状を呈する口縁部の特徴から、平安時代の9世紀中葉に比定できる。As-B直下のVI層においてはイネのプラント・オパール分析から水田耕作の可能性を指摘した訳であるが、この水田耕作の



第24図 1号・2号遺物集中箇所出土遺物



第25図 遺構外出土遺物

開始年代は、この土器の年代である9世紀代まで遡る可能性を示唆しているものと考えられる。

さらに、4条を確認した溝はAs-B降下以前～中・近世に比定できる(本編14頁「溝」参照)。このうち、2号溝を除いていずれも低地の走向にほぼ平行することから、詳細な性格は不明ではあるが、この低地部あるいはその下流域における水田に関連した水路の可能性も考えられる。

3 まとめ

以上、この遺跡における各層位の年代、イネのプラント・オパール分析結果、出土した遺構・遺物から、この低地部における水田耕作の可能性や遺跡の性格について検討してきた。その結果、いずれの層においても畦畔などの水田遺構は検出できなかったものの、As-B直下においては水田耕作が行われていた可能性が高く、その開始は平安時代の9世紀代まで遡る可能性があると考えられる。また、古墳時代前期の4世紀代においては、この調査範囲内で水田耕作が行われた可能性は低いものの、周辺の低地部においての可能性を指摘できる。

いずれも可能性にとどまるものではあるが、周辺地域には古墳時代前期及び平安時代の集落及び水田が存在する可能性が高いものと考えられよう。

引用・参考文献
町田洋・新井房夫 1992 『火山灰アトラス』東京大学出版会
早川由紀夫・藤根 久他 2008 『ウイグルマツチング法による種名酒川噴火の年代決定(再検討)』『日本第四紀学会講演要旨集』
坂口 一 1993 『火山噴火の年代と季節の推定法』『火山灰考古学』p151-172 古今書院
坂口 一 2010 『高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向』『中居町一丁目遺跡3』p224
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
坂口 一 三浦京子 1986 『奈良・平安時代の土器の編年』『群馬県史研究』第24号p18-55 群馬県史編さん委員会

写真図版



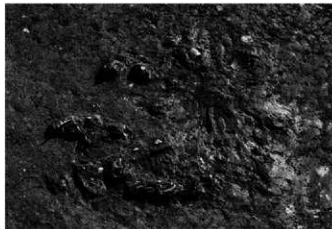
1. 調査区全景（西から）



2. 1号遺物集中箇所全景（西から）



1. 1号遺物集中箇所近接



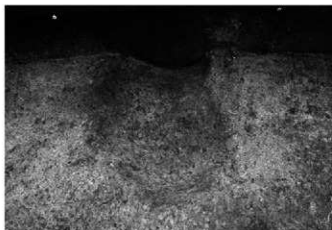
2. 2号遺物集中箇所全景（西から）



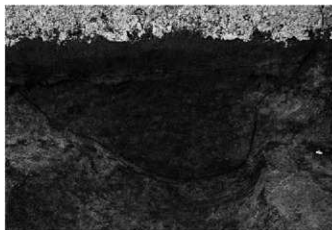
3. 1号土坑全景（南から）



4. 1号土坑セクション（南から）



5. 2号土坑全景（南西から）



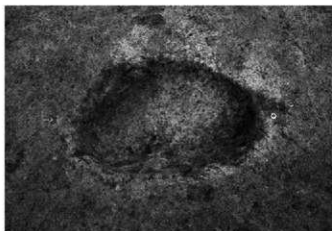
6. 2号土坑セクション（西から）



7. 3号土坑全景（東から）



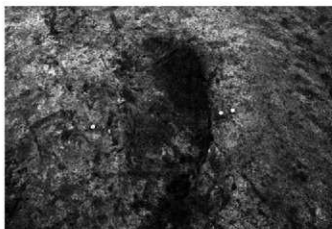
8. 3号土坑セクション（東から）



1. 4号土坑全景（東から）



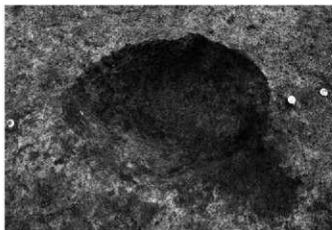
2. 4号土坑セクション（南西から）



3. 5号土坑全景（東から）



4. 5号土坑セクション（西から）



5. 6号土坑全景（南から）



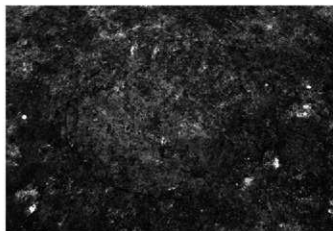
6. 6号土坑セクション（南から）



7. 7号土坑全景（南から）



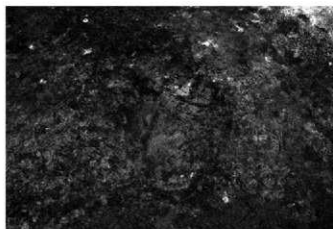
8. 7号土坑セクション（南から）



1. 8号土坑全景 (南から)



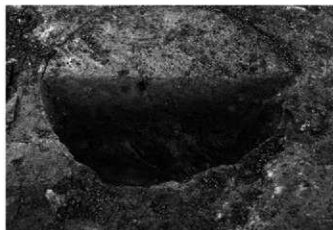
2. 8号土坑セクション (東から)



3. 9号土坑全景 (東から)



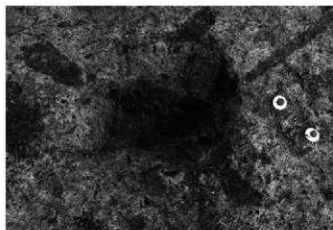
4. 9号土坑セクション (東から)



5. 10号土坑セクション (南から)



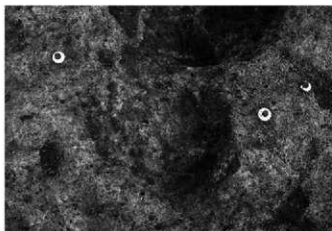
6. 11号土坑セクション (南から)



7. 1号ピット全景 (南から)



8. 1号ピットセクション (南から)



1. 2号ピット全景 (南から)



2. 2号ピットセクション (南から)



3. 1号溝全景 (西から)



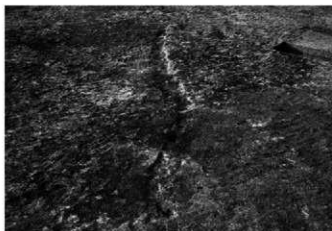
4. 2号溝全景 (南から)



5. 1号溝セクション (西から)



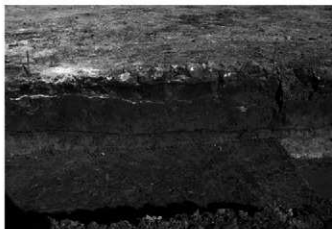
6. 2号溝セクション (東から)



1. 3号溝全景 (西から)



2. 3号溝セクション (西から)



3. 試掘トレンチ断面 (南東から)



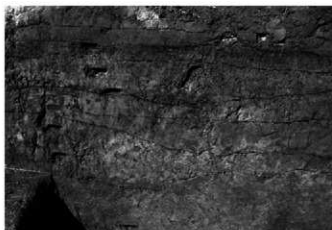
4. As-B下水田遺構確認面 (東から)



5. 1号基本土層 (東から)



6. 2号基本土層 (西から)



7. 3号基本土層 (東から)



8. 4号基本土層 (北から)



1号遺物集中箇所 1



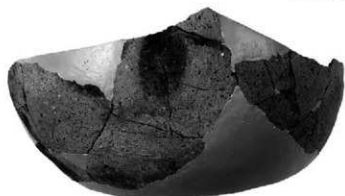
2号遺物集中箇所 2



1号溝 1



4号溝 1



2号遺物集中箇所 1



4号溝 2



遺構外 1

報告書抄録

| | |
|-----------|--|
| 書名ふりがな | きじま・しもくぼいせき |
| 書名 | 木島・下久保遺跡 |
| 副書名 | 伊勢崎深谷線(東毛広幹道【境工区】)社会資本総合整備(地域住宅支援)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第543集 |
| 編著者名 | 須田 正久 |
| 編集機関 | 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 発行機関 | 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 |
| 発行年月日 | 2012 |
| 作成法人ID | 21005 |
| 郵便番号 | 377-8555 |
| 電話番号 | 0279-52-2511 |
| 住所 | 群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2 |
| 遺跡名ふりがな | きじま・しもくぼいせき |
| 遺跡名 | 木島・下久保遺跡 |
| 所在地ふりがな | ぐんまけんいせきさきしざかいきじま |
| 遺跡所在地 | 群馬県伊勢崎市境木島 |
| 市町村コード | 10204 |
| 遺跡番号 | SA127 |
| 北緯(日本測地系) | 361703 |
| 東経(日本測地系) | 1391428 |
| 北緯(世界測地系) | 361703 |
| 東経(世界測地系) | 1391429 |
| 調査期間 | 20090101-20090131 |
| 調査面積 | 2,023.3㎡ |
| 調査原因 | 道路建設 |
| 種別 | その他 |
| 主な時代 | 古墳/平安/中近世 |
| 遺跡概要 | その他-古墳-遺物集中部2+土坑1-土器/その他-平安・中近世+土坑11+ビット3+溝4-陶磁器+石製品 |
| 特記事項 | |
| 要約 | 本報告書は伊勢崎深谷線(東毛広幹道【境工区】)道路建設に伴い、平成21年度に発掘調査が行われた木島・下久保遺跡の報告である。本遺跡からは、古墳時代から中近世にかけての遺物集中部や土坑、ビット、溝などが検出されている。 |

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第543集

木島・下久保遺跡

伊勢崎深谷線(東毛広幹道【境工区】)社会資本総合整備
(地域住宅支援)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24(2012)年●月●日 印刷

平成24(2012)年●月●日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田1784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／●●●●●●●●●●

